翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書（二）
― 手銭記念館所蔵俳諧資料（四）―

伊藤　善隆[a]

[a]湘北短期大学総合ビジネス学科

【キーワード】
俳諧　手銭季硯　手銭冠李　広瀬百蘿　不識庵節山　松浦文泰
『俳諧すがた見』『増補誹諧狂菊抄』

はじめに

本稿は、島根県出雲市大社町の手銭記念館に所蔵される俳諧資料の中から、不識庵節山著『俳諧すがた見』（写本一冊、元文四年識）、松浦文泰著『増補誹諧狂菊抄』（写本一冊、天明四年奥）、を翻刻紹介するものである。

出雲国大社の手銭家は、貞享年間に大社に移り住んだ喜右衛門長光（寛文二年～寛延二年）を祖とする商家で、町役の大年寄を長く勤めた。歴代の当主は文芸にも関心を寄せ、和歌・漢詩・俳諧に熱心であった。

出雲俳壇といえば、去来の甥とされる水鶏坊空阿の伝授を受けた広瀬百蘿（享保十六年？～享和三年）の存在が注目される（大礒義雄『岡崎日記と研究』（未刊国文資料刊行会、昭和50年10月）、「高見本『岡崎日記』『元禄式』の出現と去来門人空阿・空阿門人百羅」（『連歌俳諧研究』87、平成6年7月）参照）。広瀬家の系譜は、子の日々庵浦安、孫の蘭々舎茂竹と続き、手銭家の歴代、白澤園季硯（三代）、徳人園冠李（季硯弟）、慶敬（四代）、衝冠斎有秀（五代）とともに、大社の俳壇をリードした（両家には血縁関係もあった）。

本稿で翻刻する資料のうち、『俳諧すがた見』は、百蘿が去来の伝を出雲に持ち帰る以前には、大社の俳人たちが淡々系の俳諧を学んでいたことを示す資料である。また、『増補誹諧狂菊抄』は、百蘿が尾張の松浦文泰から贈られた著作の写本で、その内容には美濃派を批判した箇所がある。百蘿も美濃派には批判的な立場を取るため、その共通点から贈られたものであろう。

〈凡例〉

翻刻にあたり、私に句読点を補い、改行を改めた。また、異体字は概ね通行の字体にあらためたが、一部原本の表記を残した。

コト、トキなどの合字は、適宜「事」「トキ」などと記した。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに　」をつけ、（　）内にその丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。

誤記と思われる箇所も原文どおりに翻刻し、適宜その傍に「（ママ）」を付した。難読の箇所は□で示し、推定で読んだ箇所は□で囲んだ。書き誤りを直してある箇所は、直した方を本文として示し、いちいち注記をしなかった。

『増補誹諧狂菊抄』については、適宜国会本を参照し、国会本に拠って補った部分を［　］で示した。また、本文上欄への書込みと貼紙（両方とも国会本にはない）は〔　〕で示し、その直後に、それが記載されている箇所と、書込み・貼紙の別を（　）で示し、本文の合間に適宜配列した。

参考のため、原本の図版を最後に示した。

一、『俳諧すがた見』

〈解題〉

元文四年八月、淡々門の不識庵節山が、出雲滞在中に「岱青楼主」に与えたもの。「岱青楼主」が誰であるかは、最近まで不明であったが、手錢家蔵書の蔵書印の調査が進んだ結果、冠李の別号であることが判明した（田中則雄氏の御教示による）。

巻頭に載る冠李に与えた序文では、遅吟を欠点として誡めており、当時の指導の様子を具体的にうかがい知ることができる資料である。また、淡々の作品を伝える点や、当時の俳席の作法を伝える点も貴重である。

なお、手錢記念館には、同じ年の五月に節山が杜千に与えた『誹要辨』という伝書も残されており（本誌前号掲載「翻刻・手錢記念館所蔵俳諧伝書（一）」参照）、同年に節山が比較的長期に渉って出雲に滞在し、大社の俳人たちの指導に当たっていたことが判る。手錢記念館に所蔵される伝書としては、古い時期のものの一つである。

〈書誌〉

書型……半紙本。写本一冊。皮楮交漉料紙。

表紙……薄緑地に白抜文字料紙。縦二三．三cm×横一七．〇cm。

題簽……左肩双辺（墨書）。「俳諧すがた見」（墨書）。料紙に菊の花の模様を描く。

序文……「不識庵［花押］／元文四年秋南呂／岱青楼主」。毎半葉八行内外。

本文……毎半葉八行内外。

字高……二〇．七cm（巻頭「夫、天地の……森羅」（一丁表）を計測）。

丁数……二八丁（墨付き二八丁、ただし最終丁は裏表紙見返しに貼り込み）。

〈翻刻〉

夫、天地の中に生育する森羅万像、人その霊妙をそなえ、諸道みな中を以てみさほとす。神に中常、仏に中道、儒に中庸あり。俳諧またしかり。道の中にあたるものは、動静広狭、心の侭に句をなすもの也。今汝の誹風を見るに、中分の気、」（オ一）よく備れり。幽玄曲流の姿を得て、高山拉鬼の俤も具せり。その中に、ひとつの病ひを交たり。思ふへし、誹情直にして、句々を思ひ過し多し。それゆへに、捨へき場をすてすして、功なき処に心をいためて詮なく、尤遅吟なり。句を作、」（ウ一）生得はすみやかなり。なつみたきゆへに、句にとゝこほり有り。たとへは、富貴なる人の宝を用ゆる事を知らすして、ひとり老ゆく如し。句は滝水の如く、なつみとゝこほる事なきを要とす。功達猶しかり。況や、今、道の麓にあり。不達者にしては、向上の一路に至る事、他に」（オ二）おくるへし。順巻又は独吟の巻を作るにも、平日他人交席の心を以、心をさま〳〵進み、跡を思ふ事なかれ。我老師のしめしにも、句は旅人のことし。一歩も前へすゝむへし。金銀路糧を忘れたりとも、行先に又有るへしと心得て、」（ウ二）かりにも跡を見るへからすと。常に是を思ひ忘るへからす。予、此道に心かけたるはしめ、今汝の姿を得たり。淡々、常に句の遅き事を責て戒められけるを、はつかしき事におもひ、能き句せんと思ふ欲心をはなれて、人の捨ぬ場をも捨て、其場を奪ふ心かけを発し、いつとなく」（オ三）句の達者を得て、高山峻嶺の危きをも安く心得て、今向上の場に遊ふものなり。平日をのれ侭に句をなすときのくせ、必席に望みて出るもの也。句々大切に思ふは、道の至極なれと、過ては及はさるの理に落て詮なし。すくれたる句を」

(ウ三)すくなくせんよりは、麁句にても数有りたし。数多作るうちには、我おもひよらさる佳句あるもの也。句毎に労して作るときは、ねり過て聞所なくなりて、かへつて手からを失ふもの也。汝の気性、他に抽て道に秀才なる事、我云ふのみにあらす。」(オ四)人みな知れり。たゝ、おそるへくは、同門外に秀才の輩おゝし。姿は汝におとるとも、句達者にはけむものは、前へすゝむ事のはやきもの也。他にこえられては口おしき事也。我是を常に思ひおもふ。杜千、李夕はさら也。子と陽坡の両子は、道の」(ウ四)中を得て、名人の姿をそなえたり。此地の我力とたのむもの也。常々申ことく、姿は得たり。人のいろ〳〵の姿にてほまれありとて、それをくらへむへからす。今の姿を以て句をなすときは、他に抽たる一情、誰か是にならはん。たゝ句の遅吟なるは、をのれか欲あるゆへと、」(オ五)誹情にたくはへ置けるたからをおします、貴人の場はさて置き、非人乞食の捨たる処をひろひて、我たからを投て道を急くへし。路用なくても、達者なるものは旅行のはか行くもの也。子の如く、誹のたからを蔵にたくはへ持ても、不達者にては貧者」(ウ五)の同行より跡に行くへし。此さかひを平生心に捨すして、いく度も句を捨る事をわらぐつの如くすへし。捨る事、日ならすして句の達者を得へし。生れつきの誹に不堪は見へす。今句に遅きは、みなをのか欲よりおこる処なり。かく云へはとて、我一道の至極を」(オ六)云ふにはあらされとも、数年此道にくるしひ、諸国の風雅に会し、初心を取り立たる数多なれは、功達の人を見る事は知らされと、初心の姿を見る事はをのつから得たり。たとへ、予か見立違ふにもせよ、今爰にしめす処は、みな道の上達する処の杖をあたへる心」(ウ六)なれは、是を守りて損はあるまし。他にすくれて一道篤実にして、しかも抜群の器あれは、予か思ふ処も是にひとし。それゆへ我心腹を明し、爰にその病ひを論して筆記してあたふる事也。嵐雪は句情幽玄にて、はしめて蕉翁の門に入る日より句にほまれ多かりき。其角は句々」(オ七)あれて、初心のうちさして人の耳をおとろかす事もなかりけれと、道の秀才にして、句を吐く事、唾を吐くよりも心安く、人の十句を作るうちには百句を捨るを常の業として、終に一道の源を得る事、嵐雪にすくれ、蕉門一流のほまれ、一人に侍り。」(ウ七)予か如きの道に用ひらるゝも、皆その余光也。嵐雪の如きさへ、斯くあり。遅句にして其功のおそき事、はかり知るへし。旅宿とりませて心いそかしけれは、たゝ一端をもふけて是をさとすのみ。なを口にときて是を明さんのみ。」(オ八)

不識庵

［花押］

元文四年秋南呂

岱青楼主

」(ウ八)

老師半時庵年来のほ句、思ひ出るに任せて爰に書記す。

宿の春富家より高きはかりなり

左句は東山へ移居のときの句也。

元日や高尾の鐘も聞ゆなる

植す刈らす葎を宿のかさり哉

寝ぬ夜寐て柳に鶏の初音哉

鶯の定宿ちかき玉江かな

梅さくや砥屋か軒端の水煙

揚云ふや去年生れのむめの花

日は西に古鋪台やんめのはな

梅か香や出家の眠る琴の前

」(オ九)

日に這す子は門むしろ藪の梅
木々も芽や参宮湯治立別れ
春の日や孫に漕せて柴のうへ
（此句は宇治川にて柴船を即興せられける也」（ウ九）
口くせの吉野も春の行衛かな
糸さくら是そすなはち花の雨
大和路の鐘をちらすや花さかり
（此句は吉野にて
漕出せや丸山寺を花のうへ
寝られぬ夜つく〳〵嵯峨の山桜
（此句は北国にて花洛を思ふ句也
三月尽
おもしろき涙なりけり春一夜
ほと、きす歟風のあらしの傘は肩」（オ一〇）
ひと声を聞くや四月のもの、味
ほと、きすた、庭とりの羽音哉
から臼や手塚の太郎ほと、きす
郭公鳴や夢かなほと、きす
伊達に待つ人も夜のぬし時鳥
五月雨時鳥
雷をまつ心ふたつやほと、きす
ほと、きす瀬田に矢矧を継く夜哉」（ウ一〇）
ふりむくや富樫もかくぞほと、きす
あちさゐは花の中将とそおもふ
初夏の比信濃にて
菜の花のきかでもしるし信濃口
同国の湖は鐘に似て鐘湖と云
釣鐘のすは〳〵涼し湖の形リ
あやめのぼり海道百里鏡やま
僧を止メてせん方もなき暑さ哉」（オ一一）
涼しさの富貴は来たり松の月
貧しさの己れをにくむ暑さ哉
素盞嗚の家中涼しき昇かな
六月や雲に南瞻部州の図
媒の星は長らの川烏
地には鐘尽ぬ女のひかし哉
もの、ふの渋きは枝のたのも哉
石山にて
名月や京は八月十六夜」（ウ一二）
名月や蔵なき寺を尋見ん
仲秋天満橋にて
今宵満ッ天のはし立踏渡る
後月
今宵咲マん軒端の賤か夫婦中
名月、夜半迄ふり、後夜に晴たるを
秋風に仏の国の月見哉
草庵に鶴の画賛に
又留主かされと廬山の夕霞」（オ一三）
むら竹の墨絵に
此君の黒髪若し神心
放下僧によせて
竿のうへにまわるや菊の天津星
不徳といふ題に
井戸堀にぬけ道はなし五月雨

老人夫婦剃髪したりける方へ
雪を脱て二がみ山や鷹の春
はせを葉の細すき返ス時雨かな
ふりむきし鹿を包むやむら時雨
晴れて行船に野飼の時雨哉
江戸にて名月
晴れて月三笠の山はなかりけり
同所旅宿重陽
皆買て揃る菊のやとりかな
同所にて
雨に似ていかさま更てひとしくれ
（山なき国なれは此句意可思
夏の月川原おもては冬の月
初雪や四海へ富士の衣配リ
初雪や浪の届ぬ岩のうへ
雪夜月　大坂吟
初雪の拭くや生駒の鏡山
初雪や　（空白ママ）
力なく花見る鹿の寒さかな
（帰り花也
脱替す着替ぬ富貴初しくれ
年内立春
さほひめの男いそきや年の内
句歳旦
春二ッ見おろす富士の一夜哉
年なみの静に足るや桔槔（ハネツルヘ）
」（一二オ）

（白紙）
」（一二ウ）

翁　韮の籬に鳶をなかめて
鳶のゐる花の賤家と詠れけり　はせを
此附句、おきな一代一句也。前句を端書と見なしたる所もあり。
又、前句は眼前の景情を述たる也。附句は前句の目前のありさまに思ひ合せて、古人なとの歌にても綴りたる事もありけるを思ひ出したる心もあり。所詮、」（一五オ）前句の鳶は現在、後句の鳶は過去と心得へし。別吟にあらされとも同体ならす。百韵にひと処なとは、此格をよく心得たらは附て見るへし。同字同心格別ならさる時は叶かたし。端書と見なして附たるよりは、過去現在の差別にして見る方宜しと老師の説也。」（一五ウ）
ては、物を押るかな也。
には、物を押て続くかな也。
そは、治定不動のかな也。
よは、下知かな也。
歟は、うたかひ也。
をは、ものをかゝえる也。
はは、とかめるかな、又物を発す也。
もは、他をかる也。
のは、連続也無心也。
他は、なすへて知るへし。
」（一六オ）

執筆大法
先つ連中出座より前に、文台、かみ、硯箱、はんざしぎり、水引、

取そろえて床に有るへし。連衆出座ありて、宗匠より次第座列に会席へ出る間、執筆は次座に残り」（ウ一六）てあるへし。扨、宗匠より下知の時に、一座へ礼に及す。床前へかゝり、あふきをぬきて聖廟へ一礼してのち、文台を持て宗匠の目通り、末席へ下ルへし。宗匠より詞ありてから、文台を持て、床前か又は横文台か、兼定メの席へ附へし。」（オ一七）先、硯箱を文台の右へ下し、ふたを上へ向ケて箱にならへて置。それより、懐紙を折二まい宛両度に折へし。紙の裏より折付て、のちに折たる紙の中一まいをぬきて表へ折戻し、文台に置て、初度の二枚と」（ウ一七）のちの残リ壱枚を、三ツ折にして硯箱のふたへ入、折残リの紙あらは文台の下へおろし、水引を硯ふたの上へおき、それより墨を和り、筆を二本取りて見合、一本を硯海にひたすへし。忘れても、筆を口にてしめすへからす。文台の」（オ一八）うへなる懐紙を取りて、三ツ折の初折口より六分めを見合せて、誹諧之連歌と書付へし。其時に、宗匠よりほ句を乞。句者声あらは、右之ひさを立て、筆を染めて、上五を請とり、五七を続ケて請取リ、宗匠の言葉を待へし。宗匠より下知あらは、是を書へし。」（ウ一八）上五より中七は、同し墨にて書、下五を墨次へし。誹名は極て墨を続もの也。書終りて吟声高くすへし。ワキより次第皆々此法也。一順過ては、ひさを立るに及す。附句の遅き所ニ而は、見合て折々前句を吟へし。是、句をせかむもの也。本式の時は、名ウ」（オ一九）匂ひの花に極メて香あり。花前の句者、句を渡スとき、香方のもの、床へかゝる也。もしおそく香方来りて、いまた香の間に合ぬと見たらは、花前の句を緩々と書て吟すへし。次に、花の句は、兼而作者心得有る事なれは、宗匠其侭下知あるへき事也。」（ウ一九）香煙と吟声と、一所に有るを第一とするもの也。アケ句は、其侭出るもの也。是又兼而覚語（マヽ）なれは也。少々遠きさし合有りとも、執筆の了簡にてさく〳〵と書が宜し。アケ句に至りてなつむ時は、不興なるものなり。

是らは、皆執筆のはたらきに」（オ二〇）ある事也。ひたすら執筆を努るときは、自然と覚るもの也。さて、満吟あらは、四折を次第に文台に重ねて、初折の口へ、年号月日をさらりと書て置、水引を二本と三本にとり分て、懐紙を文台のうへにて、閉ざるうちに吟する」（ウ二〇）法もあり。又、とぢてのち吟するもあり。時の宜きに随ふへき歟。吟声の時は、筆に墨をひたし、右に持て右のひさを立へし。是、もし句に書誤りある時は、直すための心得也。とぢ候時は、左のひさの下へ懐紙を敷て、はんさしにて通し、水引、」（オ二一）天穴に弐本、地に三本通し、ゆるくむすふへし。是、懐紙をよむ時に、閉の中を見安からしむる也。吟声済てのちは、あふきをひらきて、懐帋を其うへに置、硯箱にふたして、文台に直して、床のワキへ置て、座を立て、」（ウ二一）最初文台を下したる宗匠の向ふ座へ下り、宗匠初め一座へ時宜あるへし。懐帋を直に、又文台のうへへおく法もあれと、天神講なとの時は、あふきへ下ロすか宜しとなり。吟声終れは、懐帋は人の手に渡るゆへ軽し。文台は重き」（オ二二）ものなれは、つゝしむ心宜しと宗師仰られき。先、大法かく心得て努むへし。すへて一座興不興は、執筆のよしあしによるもの也。必、事を安く心得す、つゝしみて努むへし。たとへ外方の句おくれたりとも、吟声せはしく」（ウ二二）前句をあけす、折々前句を上るとも、随分小音にゆるくあくへし。又、句を受取て読上るときは、随分高声に吟すへし。一座へよく句の聞ュる様に、口中合よく吟すへし。大勢会合の時は、執筆小音にては、末座へ声のとゝかぬものと心得へし。」（オ二三）巻中、貴人、小人なとの句は、遠きさし合ありとも、宗匠より尋る時、さし合なきと答て句を受取るへし。のち改て成らさるときは、前の句を宗匠より直すものなれは、執筆の誤りに決てならす。執筆の」（ウ二三）心得、兎に角、ほ句より次第、景物其外百韻にかずのならさるもの出たるを、一寸〳〵と心に覚ゆへし。軽きものは、五句三句

近きにあれは、見合て成るもの也。是も六ヶ鋪様なれと、席を重ぬるときは、自然とよく」（二四オ）覚へ、安きもの也。千句万句にてさへ務るもの也。況や、百韵はまたいと安きもの也。猶重而、秘書伝授のうへには、くわしく知る事なれは、爰に略す。大略はおもむきに違ふ事なし。連歌の法とも」（二四ウ）少し違ひ、又他門とも違ひあり。是、晋子一派の筆法と心得へし。

二見潟文台の事

此文台、他門に知らす。蕉翁一派に限る。土佐の家老相馬兵庫といふ人、文台を造り、」（二五オ）蕉（ママ）へ自画を好ミけるに、おきな其絵に二見浦の図を画き給ひ、尤是は硯の方也。左の方には、あふきをひらきたる処を書たまふ。是は、西行法師、伊勢の二見浦にて歌よみけるとき、あふきをひらき敷て、其上にて」（二五ウ）たんさくを調へられたる故事に思ひ合て、風雅は此ことく侘を第一とする事を、末世へよくいましめんため也。其あふきの地紙の処に、松か梅かをあふきの絵にあしらふ。是は、晋子の作也。白扇もいかゝなれは、」（二六オ）聖廟の神木のうちなれは也。其土佐の家老の造られたる文台、余のとは少し寸法の相違あり。是を後代一派の伝にして、其寸法にする也。寸法は覚え侍れと、是も伝受のひとつなれは、道に対して爰に略す。其文台のうらへ」（二六ウ）翁自筆のたんさくを押たまふ。

ほとゝきすまねく歟麦のむら尾花

此ほ句也。それゆへ、今も文台を造れは、宗匠へ頼ミてたんさくを調へ、裏へ押ス也。又、淡翁、自分のほ句を押れたるもあり。

漕出せや丸山寺を花のうへ

此のほ句也。且、今淡翁自画の」（二七オ）文台も京に少々あり。皆々二見潟の図はかりにて、あふきの画は略レ之。是も、翁と同しくする事をおそれて、其ひとつを略する也と、つねに物語也。是又、委くは文台伝受の巻物に有。蕉門二見文台の事は、人よく知るものなれは、」（二七ウ）右来由をあら〳〵書つらね、是を知らしめおくもの也。

」（二八オ＝裏表紙見返し・終）

二、『増補誹諧狂菊抄』

〈解題〉

天明四年十月に、尾張の松浦文泰から百蘿に贈られた文泰の著作。おそらく、百蘿に贈られたものは文泰自筆本で、本書はその写本であろう（筆写者は不明）。同名の著作が国立国会図書館にも所蔵され、本文に多少の違いはあるが、内容は同じ。ただし、国会本に比べ、手錢記念館本の方には増補された章段があり、収録されている章段の前後にも違いがある。その内容には美濃派を批判した箇所があり、百蘿も美濃派には批判的な立場を取るため、その共通点から贈られたものであろう。なお、〔　〕で示した本文上欄への書込みと貼紙（両方とも国会本にはない）は、百蘿によるものと考えられ、本書に対する百蘿の見解の一部をうかがい知ることができる。

〈書誌〉

書型……大本。写本。

表紙……香色布目料紙。縦二六・〇cm×横一八・七cm。

題簽……左肩無辺。「誹諧狂菊抄　全」（墨書）。料紙には斜めに赤茶色の横斜線が模様として書かれている。

見返し…反故を使用したらしく、墨書を塗抹した箇所あり。

封面……扉題「誹諧狂菊抄　全」（墨書）。扉ウラに「追加　竹の編戸　深山風／一書曰欲有二四者一貪貨者貪女者貪名者貪吾者是此四者也是謂二四欲一」と墨書。

序文……序題「増補誹諧狂菊抄序」。年記「明和六年丑秋九月」、「天明三年春衣更着の頃」。署名「一所不住／無名隠士」。
目録……目録題「増補狂菊抄目録」。
本文……内題「増補誹諧狂菊抄」。毎半葉一三行。
字高……二一．〇cm（本文第一丁オモテ（オ三）三行目「日本記に……連歌」を計測）。
丁数……四九丁（墨付き四八丁）。
奥書……「尾州　天明四年甲申十月　松浦文泰／雲州　広瀬先生足下」、「此一巻は尾州名古屋の人松浦文泰といへる医師の作也。いかにして予か愚名を伝へ聞れけん。校考せよとて手書して送りこされ侍る。こゝろさしふかきおのこと見えたり。書中あやまれる事もあれとも、まゝ又確論も多けれは、捨へきにはあらねと、当時獅子門信仰の人にはさしさはる事もあまたあれは、他見をはゝかり、唯家書として窓外には出すへからす。」

右、反古の裏に書綴りたるまゝに打捨置候を、天明三年春衣更着の頃、いとま有しかは、この狂菊抄を増補し、その後も追〳〵にこのもかのも書加はへて一巻の草紙とはなりぬ。

一所不住　無名隠士　」（ウ一）

増補狂菊抄目録

一　誹諧連歌起りの事
一　誹諧の事
一　俗談平話の事
一　神祇釈教の事
一　恋の詞と言ふ事
　　并長歌短歌行の事
一　無常の事
一　述懐懐旧の事
一　正風体と言ふ事
一　天尓波の事
一　切字大廻しの事　但、切字の事は至ての秘事故、略してしるさす。」（オ二）
一　仮字つかひの事
一　祈祷の事　但、秘決有て、顕はにしるかたし。
一　調伏の事　右同断。

追加

一　はいかい文字の事
一　季方の事
一　狂歌の事
目録終　」（ウ二）

〈翻刻〉

増補誹諧狂菊抄序

我に等しき人しなけれは、思ふ事いはてたゝにやとうちうそむき明し暮せとも、心えぬへき心地もせねは、いてや筆とらむとすれと、彼と言ひこれと言ひ、一かたならぬ世の中のさか出来れり。けふ長月の十六日、かはたれ時よりしめやかに降出て、廬山の草庵は夜の寂しさ、是は又終日の雨ならん。けふの一日は誰やらむならねと、閑暇を得たれは、三余のむた事にかねてのあらましをしるさはやと、かくこそ。

明和六年丑秋九月　」（オ一）

増補誹諧狂菊抄

誹諧連歌発りの事

日本記に出たる伊弉諾伊弉冉二尊の御詞を以て連歌誹諧等の根本と言ふ事、古書に見へ、別して誹諧士の拠とする事、道をおもくせむ為の妄説附会にして用ひかたし。素盞雄尊八雲の神詠より始て日本の歌と言ふ事出たるは、伊弉二尊の倡和には、未歌とも何とも名付へき物にあらさる事、明けし。まして、連歌誹諧に於てをや。論に及はす。唯、連歌は万葉集に家持と尼との諧話、伊勢物語にかち人の贈答などを連歌の濫觴といひて、然るへき物ならん。

但、日本記に日本武尊、東征の御休、甲斐国酒折と言ふ所にて詠せ給ふ」（三オ）

にゐはり筑波を過て幾夜かねつる

火たきの童、答へて申さく

かゝなへて夜には九夜日には十日を

是を以て連歌の始とし、いま正しく甲斐国酒折の神霊は連歌の祖神と崇め奉りてあり。その故をしらぬとも、是もまた後人の作言なるは、右の歌はいま世にいへる返歌にして、連歌のことく付たる物にあらす。もし、旋頭歌の附合也と謂ふへきか。何れにも、家持と尼とのことき事とは思はれす。尓れとも今是を改めむとせは、恐れあるに似たれは、唯根元の理をのみ考へしるへき事か。

其後、藤原為藤卿、鎌倉にて諸越の連句に擬へ、百句連続の式を作り給ひしより、二條良基公、一條兼良公等、代々式目定つて後は、一方の道と成れり。それより以前は、たゝ歌人の」（三ウ）一興に上の句をいひ懸れは、下の句を付、下の句に問ひ、然れは上の句にて其理を答ふると見えたり。しかして、遥後の世、宗祇の時代やらん、連歌の余興に古今集の誹諧歌を模し、下賤凡俗の詞を其侭につらねて連歌せられしより、連歌にも又始て誹諧の名は出たり。其後山崎の宗鑑、犬筑波集を撰ひ、伊勢の守武は連歌の式法を模して、独吟千句を物せしより、又誹諧連歌と言ふ名は顕はれたり。然るを、貞徳翁、御傘と言ふを著述して、誹諧の式目を定められしより、連歌に続て誹諧といへる一道にはなれると見えたり。

貞徳翁始て誹諧連歌の元祖となれる事、子細あり。私事の趣意にあらす。山事なき人〳〵の仰を蒙り世にもゆるされての事なれは、初て誹諧の式を作られたるか、其大むねは連歌の式を模し、和漢遍のおもむきに」（四オ）せられしと也。委しくは別記にあり。

誹諧の事

そも〳〵古今集に初て誹諧の二字出たりと言へ共、貫之等の趣意いかなる事とも古人さへはかり難き由を書記し置れたれは、いま更兎角を評せむ事、其恐れなきにしもあらねと、大凡其趣を按するに、常体の歌よりは、心詞に作意を巧みなし、上の句、下の句に理屈をよくいひかなへる様の事なるか。されは詞は直にして心の作意工みなるあり、心は直なれ共、詞のいひ廻しありておかしきあり。又、心詞共に巧み工（ママ）みなる有。たとへは

梅のはな見にこそ来つれ鶯の

ひとく〳〵と厭ひしも鳴く

此歌、鶯はひとく〳〵と鳴く物故に、我は花をこそ見に」（四ウ）来つれ、汝を驚かさん為にはあらぬを、何故に人の来る〳〵と忌嫌ふそと言ふ心也。是、詞は直にして、心に理をせめたる利口の歌なり。又

いくはくの田を作れはかほとゝきす

してのたをさを朝な〳〵呼ふ

此歌、郭公の異名をしての田長といへは、其理より出て、是又利口の歌也。此類は、心の誹諧共名つくへきか。

山吹の花色衣ぬしやたれ

とへとこたへす口なしにして

これらは心詞共に曲あれは、心詞かけ合せたる誹諧ならむか。

世を厭ひこのもと毎に立よりて
うつふしそめのあさのきぬなり　」（オ五）

此歌、心は直にして、詞のみうつふしそめ抔やうにいひ懸たる作意なれと、詞の誹諧といふへきか。いま推量する所かくのことし。委しくは歌道の家にて尋ぬへし。

扨、誹諧連歌は、宗鑑守武時代より桃青の頃まて、桃青より今までの変化流行、さま〳〵也。江州彦根の許六か暦代（ママ）滑稽伝に書記したれと、其趣、註釈なけれはしれかたき故、今其一二を演へし。宗鑑やらんか句に

月に柄をさしたらはよき団扇かな

此句、月を団扇と見たるはかりにて、詞直なれは、心の誹諧と言へきか。又、誰やら古人の句に

折ふしとあへさつもよきな首尾かな

挨拶を和（ママ）さつにいひもぢり、茄子をな首尾と言ひ廻したる詞の利口にして、是等や詞の誹諧とも謂へし。」（ウ五）芭蕉前後の誹諧は、大かた此体にて、いま世のことく、連歌に紛るゝ優美の詞をつかはす。されはこそ、名古屋にて越人等か芭蕉流の句作を古き人に見すれは、一句の上に誹諧も誹言もなしと不審し嘲りたるよし。一句の上の誹諧とは、四手の田長のことき理屈つめ、誹言とは、右にいへる、あへさつ、な首尾類ひのいひ廻し等の事也。然れは、桃青時代迄は、理屈詰といひかけいひもぢりの詞をたくみなして、それを誹諧の姿詞とせし物也。

〔支考か細工の妄説〕（六オ・み書込）

此姿と言事、いま芭蕉流支考か細工の妄説をのみ聞泥たる輩は、句意の模様を以て姿と覚たる者はかり也。さる事にあらす。彼支考か十論に、姿情と言事有。以之外なる相違、一笑にたえす。是より発て、詩歌連歌等にいへる姿の事をさへ、支考流の誹諧士は、」（オ六）取違へてあらぬ僻事をもてはやす。歎かしき次第也。事長けれは前段に記すへし。

さるを芳山、桃青等出て、心詞の理屈、狂言をやめて、唯俗談の［侭］に句作りしより、始ていまの誹諧の姿は出たり。尓れ共、古今集の誹諧歌より見れは、まことに［芭蕉以前は連歌と誹諧の姿は明白也き。］芭蕉以後、いまの風義は、誹諧にはあらて、唯、俗語の連歌といふ物になれり。芭蕉流に誹諧の姿は、決してなき事に定まれり。さる程に、此頃の句作は、大かた連歌に紛れ、優美過たる句作、折ふし見へたり。昔は、優美の言語は連歌めくとて、制禁なる由。此境は、当世の誹諧をのみ仕習ひて古代の姿をしらぬ輩の論には及へからす。尓れ共、古くいひ伝へし詞は残りて、いまも世間に一句に誹諧かなき、誹言か弱き抔と口にはいへと、何か誹諧やら、何か誹言やら、」（ウ六）其差別もしらて、人并にいふ事とのみ覚へしならん。今、芭蕉流には、始より誹諧の姿なけれは、素より誹言の詮義は入らす。たま〳〵誹言あるて、誹諧の姿をいへは、古風なりとて嘲るにあらすや。其古風か則誹諧の体やら、今の芭蕉流は俗語の連歌やら、文蒙人の寄合なれは、評するに足らすといへとも、此後三十年五十年も過て、心さしあらん童蒙のためにかくはしるしをく物也。代〳〵の変化はおほむね許六か滑稽伝にて考ふへし。

俗談評（ママ）話の事

〔支考か謀計〕（七オ・み書込）

そも〳〵芭蕉家の遺書遺言は多く支考か謀計の賊徒より出て、其真偽量かたしといへ共、芭蕉一代の句作を考へ見れは、誠に此俗談平話の詞は、芭蕉」（七オ）流義の趣意にかなへる物から、暫く評すへし。夫、誹諧の姿とは、前に言ふことく、見立、理屈、狂言のみにして、

巧なる事はかり誹諧の躰といひしを、芭蕉時代より其理屈体狂言綺語の風義をやめて、朝夕世話の詞を其儘に五七五とつらね、それか中に余情をふくませて、人情の思ひをのふる事、詩歌連歌にも当らぬ事になれり。芭蕉前後の誹諧は、見る人聞人ともにとつと笑ひ、一座の興を催す計にて、街放下豆蔵の咄を聞ことくなれは、人心の誠を尽し、鬼神をも感せしむる誠の事にはあらさりし。然れは、芭蕉以後の俗連歌は、其詞賤しく、凡下なりといへとも、人〳〵の吉凶、山川花月の風景まて、句に作る物なれは、其座は勿論、後〳〵五七十年過ても、をの〳〵小首傾けて感称し、事に依ては、」（ウ七）不覚の落涙する句も有れは、誹諧の名に誹諧の姿こそなけれ。桃青の一手柄と謂へし。

古風の狂言綺語をやめて、俗語の連歌となれるは人みな芭蕉より始しとはかり覚へしは、彼支考か十論に、古池や蛙の句に辨説をあやなし、妄言せしより出たる事也。元来、芭蕉は季吟門葉たるか、其頃はや古風変して、爰彼今世の如き俗談の句作と成を、芭蕉は漂泊の風雅人にて諸国を遍歴し、所々に弟子も多く有し故、終に芭蕉より始まりしと思ふは、ことはり也。大海の古今を知らぬいま、世、井中の蛙はかりの故ならん。けふにても古今に通せさる誹諧士は、宗匠と成ても、其差別を知らす、をのれ一代切の物知りにて、終る者計也。」（オ八）誠や、韓退之か禽獣の襟裾せると嘲り笑ひしもさる理なるか。

去りなから、此俗談平話にさま〳〵あり。大身高貴の人〳〵より、蓑笠に鎌鍬の土民まて、我朝の風俗とて好てすれは、成安き風雅故、其たけ〳〵、其身相応の風俗をいへは、其人〳〵に依て、又その善悪も有へし。されは、名府露川か門弟子のことく、武家はかり寄合ての平話には、切るの突くの、鎗よ長刀よ、鎧着るは籏上るはと、それはかりの誹諧といひ、其外職人農民の類ひもをのれ〳〵か常より外は知らぬ者故、それたけの楽みとなる事、又風雅の一徳也。尓れは、此俗談平話を其侭に句作る事、道の弘まれるはしめとなる物か。」（ウ八）

此の事に付て、古代より制禁遠慮等の事あり。何者にても我職分の事をいはす、又一座にその職分の人ある時は、遠慮する事成しを、近年、其誡めを用さるも亦一理あり。貴賤老若男女とも大勢寄集たる会席にて、遠慮すれは、さしつかへる事多き故也。尓れ共、面々をのれ〳〵か職分の事をいはさるは、事少くしてさしつかへなし。よしそれも品に寄るへきか。又何ほと大勢の中にて遠慮成かたくとも、一座の人の心にさはり、賤しめ嘲る様の事は常〳〵とても其心得有へし。

されとも、其心得なき宗匠は偏頗に成て悪かるへし。惣して風雅を譬へていはゝ、詩歌は束帯して殿上に座せるかことく、聯句連歌は烏帽子狩衣なとにて花の下に」（オ九）立るかことし。素より賤しき姿ならねは、其所行も又優美にして、定まれる格式あり。尓るを俗談の誹諧に至ては其姿賤しといへとも、其興ある事、極りなし。大名も躍をとれは、法師も書院にて奴を振り、鍬の柄に金箔ををけは、屏風は骨を鏡台に用ひ、街談義にも聴衆多けれは、塩辛売も唐詩選の講読する抔と変化様〳〵にして、是を誹諧の手柄一興とも謂へし。されとも一方の道といへは、仮初にも師範と成へき者は、心得有へき事ならんか。俗とは風俗の事にして、その国、その所、其人のならはし也。平話の平は、平［生］、平素の平にして、国〳〵、所〳〵、人〳〵の平生あれは、長崎の上手は松前の宗匠には心許なく、熊野の弟子は木曽路の師範うけむ事、覚束なきやうなれ共、其所をよく理会したる宗匠は」（ウ九）今世にそれ誰そや。そも〳〵又俗談にも道にかなふ有り。背くあり。姑をそしり、嫁を憎むも常談なから、句に作る時は、其心得有へき事ならん。すへて非義不実の俗は慎有へ

き事、古代よりの誡め習ひ也。

神祇釈教の事

それ連誹懐紙のおもてに、神祇釈教等をいはぬ事、いかなる子細ならん。知らす。誹諧は、其もと連歌を模したる物なれは、連歌の家には此事の故実にてもある事か。然れとも、今按するに、百韻の中、月花を言ふ事、景物のおもく賞翫なる物と言ひ、惣しての事に、春秋をのみいへは、夏冬はをのつからこもる故にや、古今集を始め、代々撰集にも春秋恋の部は多くして、夏冬その外は少し。さる事を学へる物にや。花月の景物に」（一〇オ）つれて、春秋恋は三句より五句迄、夏冬其外は一句にていひ捨、又は三句まて続けとも、四句、五句とはゆるさす。畢竟連歌の百韻も古今集に准せし物にや。さる物から神祇釈教の類を表に禁せしか。左なくても、表の内は物の始るか故、安らかにすへきためか。十句表の時、恋を二句さし加る事、是亦故実の習あるよし、口決をうくへし。

恋の詞の事

古伝の誹書に恋の詞、非恋の詞とて、二條に書わけ置たり。尓るを、芭蕉流には、心の恋は恋にして、詞の恋は恋にあらすと立し事、いかさま理に当れる事かとおもひ居たりしか、此ほと能々考へ見れは、此所には、いさゝか論もこそ有へけれ。昔の誹諧は前に言ふ如く、姿のみ誹諧にして」（一〇ウ）句情の詮義なかり［し］故に、心の恋と言事始よりあらされは、恋に成へき物をいへは、則恋句に用ひたると見えたり。今、芭蕉流は、俗語の連歌なる故、誹諧の姿は捨て、句情をのみ味ふ事なれは、傾城、野郎ことき唯人物の名にして、恋にたてぬ事、句情と姿の差別より出たり。尓れ共、若後家、娘類と違て、もと傾城、野郎類の者は、押出したる恋の人物なれは、句作に依ては、何れとも成へけれ共、全体人物の名なれはとて、表なとには遠慮有たき物か。亦、若後家、娘等は、押出したる恋の人物にあらす。されとも、若後家は不祥の物にして、述懐かましき物なれは、是又表には遠慮すへからむか。娘又は聟の類ひは、表に言とも、芭蕉家の発明に随はゝ、其恐れなきに似たり。尓れ共、いま芭蕉流に、心の」（一一オ）恋といふ句を聞くに、何所にひとつ恋らしき事もなき句作多し。たま〳〵恋句あれとも、弐句三句と続けは、大かた附はまり、打越になる事多し、さる故に、大体は恋を二句にて言捨る事、近年の了簡なから、古式に背きし私事也。但、支考か才覚にて、長歌行、短歌行と言ふ事あり。

此、長歌行、短歌行といえる、支考か発明才覚にして、詩文章の名目をかりて作れる物也。しかるをいつれの所にてか、歌仙行、百韻行、源氏行なとゝ端作に名目せる由。かた腹痛く一笑すへし。其行の字はいかなる故そと尋れは、興行の行の字と答ふる由。文蒙人の才覚たて、出所もしらぬ不吟味より起りたる事なるへけれは、笑止千万と言も余りあり。」（一一ウ）

其短歌行と言ふは、纔に廿四句なる故、花月につく春秋も、恋も二句にて捨る由。濃州芝原の五筑坊か料簡のよし。是等は、元来短き巻故、さる事とも尓るへからんか、素より長短二行の巻は、古式なく、詩の雑体の内、行といへる名目はかりをかり用ひたる才覚なれは、五筑坊か発明も当然の理とすへき物ならん。返す〳〵恋の詞として、傾城、娘抔とさへいへは、恋に立て、去嫌やかましく、恋に立されは、三句五句と続ける時に、事の闕るに似たり。有力の宗匠あらは、かやうの所こそ発明了簡も有へきか。

〔五竹坊か事〕（一二ウ・書込み）

但、此短歌行の事は、越人か不猫蛇と題号して、支考か十論并露川等か事を嘲哢批言せし書籍の中にいひ置たる事あり。表四句裏八句なるに、初折の裏のはしめに月を出して、表裏の」（一二オ）模様をもたせたるを甚以詰れり。然る故、今按に表に月

なき時は、盲俳諧といふ物なれは、是等も五筑坊か春秋も二句にて捨る発明の例に倣て、発句、脇、第三迄の内に夏冬とも発句につれて月を出す事とせは、然るへし。花と違、月は四季共に用ゆる景物なれは、さしてむつかしけもなく、又其裏へ廻り、わつか八句の中に月花二つも事やかましからて、然るへし。一句、又さもなくは始より表六句裏六句定めをかは、猶安かるへし。かほとの事を五筑坊も心の付かさりしは、いかならん。是又、支考末流の輩にいまた有力才学の宗匠出来らぬ故か。

無常の事

言ふに及はぬ事なれ共、近年の俳諧士は俗語の」（ウ一二）尽にて成安き風雅なる故、悪蒙の族も年経て上手にはなれ共、全体不学の文蒙故か、斯様の事とも弁へしらす押出したる祝義の席なとにても、むためきたる句作をして我は顔なる輩も見ゆれは、初心稽古の内は格別の事、何某の誰某のと名を得るほとの俳諧士なとは、かゝる事をも能々吟味すへし。無常とは、世のはかなき事にて、飛花落葉を見ても浮世を観し、朝顔の夕影またす、如露亦如電の有さまを観する事也。支考か八体といへる名目の中に、観相と言ふ名目あり。皆々、無常、哀傷、述懐、懐旧の体相にして、慶賀の席にてはいはれぬ一体なり。予か俳諧味噌苞の中に委しく評し置たり。

述懐懐旧の事

前にいえる無常の事は、十人に四五人は知る者あれとも」（オ一三）此述懐々旧の弐ヶ條は知らぬ俳諧士多し。余りと言ふもあまり有。文蒙也。細川幽斎の聞書といへる歌書に、述懐とはおもひをのふると言ふ字なれは、吉事をよむとも然るへき様に見えたり。此懐の字は、フトコロとも訓して、心にこめておもふ事なり。尓れは、君は千代ませと思ひ、世は久しかれと思ふも、歌によまは幽聞のことく述懐なるへけれと、成らぬ事をなれかしと心に願ふ思ひをのふれは、祝言の題の詠方とは聊子細も有へからむか。さる故に、述懐といへは、多くは憂患鬱憤の思ひのみ也。或は無常の世を嘆息し、又は志を遂すして齢老ひ、扨は無失の難をうけ、よきに付、あしきに付、心に思ふ事の、其通りにかなはすして、徒に過行を歎くへうの事。又懐旧とは、是もひとつ〳〵、人にはいはねと、老て幼稚の昔を思ひ出し、若き人も面影を慕ひ、亦は」（ウ一三）古き書籍なとを見て、古人の事を思ふ等、皆懐旧の情也。然るに、俳書の中に、二ヶ條の詞よせを出せり。是等も、恋句のことく、心の述懐々旧は取用ひて、詞の述懐々旧はとらす抔と言ふへきを、其沙汰なきは妄昧の至りといはむか。されはこそ、近世美濃辺宗匠分の者の句に、一とせ歳旦の第三に甚しき述懐をいひたる有し。是等は、詞の懐旧述懐は知りて、句情に不祥ある事を知らさる聾昧といふへからん。かゝる人さへ、好めは上手にもなる事、日本自然の風俗なから、人の師範もすへき日には、ゆめ〳〵麁忽の事有へからす。いにしへ、人の藝術は其師よりゆるされて、人の師とも成しとかや。今は、我藝術を我とゆるして人の上座にゐたかる高慢邪智より、万の陵夷せる事、歎きても〳〵、猶余りある事にそ。」（オ一四）

正風躰と言ふ事

〔此段相違〕（ウ一四・紙貼）

正風体と言ふ事、桃青の口より出たるか、又は支考か例の姦計なるや、又昔より言伝へし事か、其境は知らすといへ共、今世芭蕉流の人の口癖也。それ正風とは、和歌にさま〳〵の異体出て、陵遅せる故、それに対して正風躰といへる也。手短にいはゝ、古今集の俳諧歌に対すれは、其余は皆〳〵正風体也。尓れは俳諧といへは、最早一躰にて、其一躰の中に正邪変風等の詮義は入へからす。されは、此俳諧連歌に対すれは、正風は則連歌也。然るを、今の俳諧士は、正風体といへるは、何に対して言ふ事やらん。よしそれとても、和歌の

ことく、元来雑体別れて正風の一体定りたる物ならは然るへし。前に言ふことく、宗鑑、守武以後、数年変化はしたれとも、いつれを正にして、何れを変風異体邪風と」（一四ウ）せむや。畢竟、いはゝ古風は誠の誹諧体にして、今の芭蕉流は誹諧の姿を失ひ、全俗語の連歌と成たれは、却てむかしの誹諧こそ正風にして、今世のは陵夷異躰の風雅とも謂へく、又連歌家より今の風躰を評せは、夷曲ともすへからむか。予か太山颪追加口上書に、料簡し置たるを見合すへし。嘲哢集とやらん古き誹書に、正風躰と言ふ事有しを、近き頃、見出せし。尓れば、此正風と言ふ事は、芭蕉以前に誰人かいひ出せし名目成るへし。もろこしの詩聖に、正風変風抔言ふ事侍れは、それを模して正風といふならん。何れにも本文にいふことく、誹諧体と一名目立たる中に、猶又正風異風の論は有まし。但シ、かなたとこなたと一やうならさるを非正風と言ふ事にや。尓らは、東に正風とせるを」（一五オ）西にて好まされは非正風とするか。左右五ッ〳〵の論にして決し難し。

天尓波の事

漢文を作るに、字義、文理、句法、文勢と言ふ事有。字義は其字〳〵の種性、文理と言は文字上下の置様にして、則日本の手尓波も同し意味也。句法とは、一句〳〵の長短緩急の事。文勢とは、一体始終成就の上にて、可否巧拙を論する事也。此日本は、和訓を以て言を伝へ、仮字を以て文を作れは、字義の詮義は入用なけれ共、文理の手尓波、句法の語路一体、文勢の論に至ては、替る事なし。先つ文理とは、仮字にてかけは、そんしたてまつり、なれ共、漢字の尓にかけは、奉存と顛倒して書にあらすや。又和文にては、　」（一五ウ）

田の畔の雀落穂や拾ふらん
田の畔の雀や落穂拾ふらん

〔許六、支考事〕（一六オ・書込み）

此や の字の置所にて考ふへし。句法は五七五の語路の事にて、二句ともに口拍子の調はよけれとも、文理のや の字、置所にて、一躰の文勢句情大に相違す。かくのこときは、一句心安きてにはなから、それさへ委しく伝授したる人なし。貞徳流には、此文理手尓葉の事委しく口決して、其事よくすまされは、師範をゆるす事なしとかや。古来、正しき伝授なるか故也。然るを、芭蕉の門下支考か書る古今抄の類ひ、許六か記せし宇陀法師等に、少々手尓波の事有といへとも、両士共に以の外なる相違、剰同門家より出て一様ならぬは、いかなる故そや。つく〳〵按すれは、両人ともに芭蕉よりの伝授にはあらすして、何れも辨説と見へたり。」（一六オ）天尓波は日本の風俗にして、母の乳房を放さぬ内より、既に和語を覚る物なれは、自然の理にして、外に伝授事とて習ふ事にあらす。されはこそ、基俊、俊成時代迄は歌道に師弟と言ふ事なく、素より天尓波伝授抔と言ふ沙汰聞も及はす。然れ共、古代の歌に一字一文の誤なき、火のあつて水の冷なることく、学すして日本自然の風俗なる故也。さるを、定家卿時代より、天下一たひ乱れて、栄枯地をかへ、上下混雑してより、人々の言語さへ移り替ると見えたれは、日本自然のてにはも、訛ちらしてとり失ひし物か。さる程に、伝授口決をうけされは、古歌も解しかたく、自歌もよめぬ事に成にけん。さは去なから、堂上公卿の御方には、故実を守りて道の正しき故にや、上手下手は有へけれと、歌人、連歌師、扨は、貞徳流の俳諧士に」（一六ウ）天尓波を誤る様なる文蒙は一人もなし。そも〳〵手尓波と言ふは和語の通用にして、日本一列替る事なし。譬へは、京の大工か建たる家に、江戸の畳さしか畳を入るれ共、闇に符節を合する事、天下の寸尺同しきか故也。芭蕉家に限りて寸法定らさる故、一門下の中にても、許六、支考かことき相違あり。今とても、芭蕉家の秘伝うけたりとて切字のなき発句する人あり。同門下にて同し伝授うけたる人に見す

るに、切れぬと言人あり、切れると言人有て、三人三色、五人五色にわかるゝ事、畢竟教ゆる者も、学ふ人も、尓としたる捕へ所なく、たゝ推量の高慢のみにて、何の益もなき徒事と見えたり。誠、伝授の的切なる事なら、貞徳伝来のことく、十人は十人なから闇に符合すへし。さるを芭蕉家支考か作り事の證拠には、十人十色の」（オ一七）相違を見て、恥おもふへし。古来より伝はる大廻しと言ふ切の中より、挨拶の切、心の切、抔と元知れぬ名目を拵へ、愚人を欺て、金銀を貪取しを、今さへその謀計に誑かされて高慢のみに耽り、初心の律儀なる人の耳を驚かすはかり、道知れる眼よりは、論に及はぬ狂人共やもと、此大廻しと言ふ切の事は、古流にはあれ共、芭蕉流には決して聞及はす。大廻しと言ふ事を知らぬ故に、色〳〵の作説出来たる物成へし。かく文理の手尓波句法の語路さへ知らすして、文勢の巧拙可否を論する事、沙汰の限りと笑ふへし。誠に九拾九疋の鼻かけ猿の中にて、壱疋はかり満足したれはとて、よからぬのみならす、却て嘲り笑れん事、あらかしめ知りなから、是を糺す日に至ては、百万の鋒さきを以て向ふとも、何そ恐れん、惶るへけん。一筆を下さは」（ウ一七）摭に手間は入らし。衆人よく思ひ量れ。

此、手尓波の事、近代別して猥かはし。芭蕉存命の頃か、友吉といふ者の句に

更科の月は四角にもなかりけり

此句を考ふるに、姨捨更科と月に名高き所なから、四角にも三角にもなく万国ともに丸きと言ふ事なるへし。尓れは、天尓波の置所、大に違へり

更科の月も四角にはなかりけり

かく言へき句意成へし。更科山の名高き月といへ共、四角にはなくて、やはり丸いと言ふ心に聞へし。是、もの字、はの字のをき所を考ふへし。扨又、作者は異物妖怪好なるにや、更科は月の名所にて、景色日本に勝れたるを愛憐する事なるに、」（オ一八）友吉は四角か三角に替たる物と心得たるにや。古今希代の殺風景、更科の月〳〵と称美すれとも、四角にもなき物をと名所を嘲りたる句意、さりとては、無風雅の趣向、おほくの古人を欺き笑ふ。理に当つて、浅ましく、拙し。かゝる句作は、聞拾（ママ）にして書留むましき事なるに、雑談集の撰者も無風流の俗意なるか。但、又、友吉に末代迄恥辱を与へむとの事なるか。いつれにも、芭蕉家の書籍は、かゝる文蒙のみにて、笑止千万也。元来凡俗の伎藝なから、誹諧も其もと敷嶋の道より別れ出たるものなれは、少しは心得有へき物を。

扨、此手尓波違と言ふは、四角にはなかりけりとは名にあふ更科の月も三角にも四角にもなく」（ウ一八）して、諸国一統丸き物を何故名高く称美するそと、殺風景の句情なり。

月は四角にも、といへは更科の月は四角にもなく、外に何方か四角なる月の有様に聞ふる故、弥以落着せす。いつれにも沙汰の限りと言ふ物也。

右是までは、明和六年の秋、書記し置たるか、下段の添書は、天明三年春二月書加へたる物也。

一　連歌誹諧等一巻次序の事　并花月の座を定めし事
一　発句の事　并切字伝授の事
一　脇句の事　付韵字留と言ふ事
一　第三天尓波留の事　付文字留の事
一　祈祷の事　付五音連声通縁□親疎連読
　　断絶の事

」（オ一九）

右は、書記し置たれとも、古流の秘決と言ひ江戸宗匠より、露顕を歎き越したる故、略して此度は載せす。但、竹の編戸に委しく記し

置たり。

追加

切字大廻しの事

〔支考妄作〕（二〇・オ・書込み）

連歌誹諧等発句切字の伝授に大廻しと言ふ事あり。古代秘事口決にして、太（ママ）切の事にせしを、近年は昔と違、秘伝事も常となり、古道具屋の店さらしにさへ、折ふし見当る様に成たれは、浅〳〵敷もてはやせとも、元来正しき伝授を知らさる故、確なる説受になし。尓るを芭蕉家支考か妄作の説に、中の切、挨拶の切なとゝ、道もあらぬ」（一九・ウ）新名目を立置、衆人を誑惑せし毒気みち〳〵世の妨と成たる事、以の外なる邪僻と言へし。此中の切、挨拶の切抔と言ふは、皆〳〵大廻しの事なるを、其大廻しと言ふ根元を知らぬ故、推量の妄説を作りたる物なれ共、衆人その本を知されは、さる事と心得て、おこかましく振廻ふ輩、一笑にたへす。彼支考か黨の書籍に、

あなとふと春日のみかく玉津嶋

と言ふ句を、玉津嶋あなとふと、廻る句也といえり（ママ）。腹筋のよれる程おかし。それはひきうす廻しと言ふ物也。詩には此格を倒装と言ひ、歌、連歌、誹諧共にかくのことく上下顛倒して言ふ事常なれは、わけて大廻しと言ふ物にあらす。そも〳〵大廻しといふは、風雅の道、数年修行功者の上にて伝授せされは、尓と知れかたし。其故は、見聞」（二〇・オ）いつ方にも切字切所なけれとも、一句の上にて何となく切所正し有を言ふ。然れは、初心未熟の輩か及はさること理り也。元来、此廻すと言ふ和語の本意を知らさる推量故、玉津嶋あなとふと、廻る抔やうの、子共を欺すやふの事をいひ出せしならむ。此の廻しまはると言ふ和語は、口決伝授うけぬ人も、従来風雅を知らぬ人も、常談にいひもし、聞聞（ママ）わくるにて知るへし。譬へは人の世帯なとに付て、渠はよく銭を廻す、銭か廻る、或は身のうへの取廻しかよき、又は只今より御引廻シに預りたし抔言ひ、金銀をふり廻し下役を引廻す等の語は、人も言ひ我も聞わくる事、常談なれ共、所帯をとらへて振廻す事にもあらす。下役に縄にても付、馬か牛かの様にひき廻す事にあらさるは、皆能く知る所也。然れは、金銀の貯へ用意にてはなけれとも、入用ある日には、何程」（二〇・ウ）にても調へて間を合せるをふりまはしと言ひ、下役、或は門弟子抔を下知し、導く事を、ひき廻す、取廻すと言ふ事ならすや。句作の廻しといふも、定かに切字とてはなけれ共、切る所あり、又常談にも其事をそれとあらはにいはすして、さとすやうの事をいひ廻しと言にあらすや。さる事と心得て詩歌連歌常談の通用もいひ廻し様に依てよく弁ふる事なるを大廻しといへは、けしからぬ事のやうに覚へ、又はひきうすを廻す様に理会したる事、いと片腹痛し。よく知る人に便りて修行すへき事歟。

仮字遣ひの事

古へより、仮字つかひの事、さま〳〵伝授あり。又、家〳〵の口決習ひ等あれ共、其根元は漢土の四声に直拗の音語、或ひは、字義に依て、をとお、いとゐのことき」（二一・オ）違ひ有とも、是又天性に出て自然の物なれは、強て是非すへき事にあらねと、日本は訓のみにして、四声をわかつ事なき故に、かなつかひの本立は、韵鏡の理によく通せされは論し難し。尓れ共、近年荷田東丸と言ふ人出て万葉集を訂せしより、大むね仮字つかひの理は明かになれり。猶又、難波の契沖とかいへる蜜宗の僧も万葉集に依て、和字正鑑抄とやうの書を著して、委しく訂し置たり。我此人〳〵の書に依て改め書むとすれ共、老年に及ひ、根気労れ、精力弱く、記憶も薄く成り、素より短才の晩学なれは、事の繁きに倦て、悉く学得る事あたはす。数百年来通用の尓にすれ共、是（ぜ）を知て非を取るに似たれは、我なか

ら恥おもふのみ也。

万葉集古学の理正しといへ共、不学短才の我なれは」（ウ一二）事に道理明かに知れかたき事多し。たとへは、思ヒ、此ことく、ヒフへの三語に通ふ仮字つかひの類ひは、其もと立、一を知て万字ともに通達すれとも、梅の字仮字、往古は宇免にして、近代は無免と書事、古今の是非いつれならん。宇と無との書様、其根元ヒフへ三語のことく、明かなる例を知らされは、定かに弁へ難し。よく知る人有らは追て尋ぬへし。

若き人〳〵は、此仮字つかひの是非を糺さむと思はゝ、近年流行する荷田家の古学、扨は難波の契沖等か書籍を以て本とすへし。其内、天尓波も配りの仮字は事少き故、訛りなしといへとも、繋きの仮字に至ては数〳〵也。是又、漢字の音にわきて漢音」（オ一三）呉音等の差別あり。たとへは、法の字は、入声にして、〻ホフの仮字は呉音、〻ハフの仮字は漢音也。法燈（ホットウ）、法華（ホックヱ）は呉音、法度（ハット）は漢音の仮字にて、考へ知るへし。ことに直音拗音の仮字つかひは、文字の義理四声等に委く通して、其上韵鏡に熟達せされは、明にしれかたかるへし。予かことき不学短才にては、とても及ひかたく、且ッ老衰に至りぬれは、止むより外なし。猶又日本のひらかなと言ふは、心をつけて書へく、読むへき事也。伊勢物語に、移シ殖（ウヘ）バの句を、殖（ウヘ）シ殖（ウヘ）バとよみ違ひしは、うつ（ッ）しの仮字をうへしとよみたる、うつ（ッ）し、うへしの筆画似よりて、紛らはしきゆへなり。此類ひ又数〳〵有。よく心得へきにこそ。

祈祷の事

神社仏閣へ奉納、其外常〳〵家督、婚礼、誕生、養子」（ウ一三）等祝儀の発句として贈る事有り。皆〳〵祈禱祝言なるを、元来芭蕉家には此故実伝はらさる故、甚しき不吉をいふ人あれとも、我も人も知らぬゆへ、さして其詮義する人もなし。連歌家、又は貞徳流の式法をしりたる者は、大に忌〻嫌ふへき事也。私事の慰にする誹諧は、いつれにても尓るへし。もし、故実の吟味正しき御公家なとにては、いかゝあらん。伝授をうくへし。殊に祝の字、意味合、いま俗の通例に言ふ。祝義は義理違ふ事なれとも、その事をさへ知らぬ人多し。口伝にならてはいひかたき故、細釈は爰に略す。

調伏の事

是は祈禱の裏なり。上に下、左に右、吉に凶、夏に冬、みな陰陽表裏ある事、天地の常也。されは、歌道にも」（オ一三）呪咀調伏の例はあれ共、尓としたる式法も故実も聞及はす。畢竟、後世の事故也。連歌には此式法故実習ひある事也。然れは、誹諧にも摸し用へき事なれ共、いまた其例なし。去なから、元来誹諧は連歌にもと付たる物なれは、其式法なり共、伝授有へき事なるを、当国尾張には、古代の誹諧道退転して、芭蕉家支考の妄説のみ流行し、本説伝はらさる故、慶賀の発句、或は神社仏閣へ奉納の禱祝吟の発句に不祥不吉調伏の響ある事をしらす。追悼、凶事抔に慶賀のことふき等ある事、歎息するに堪えたり。昔、織田信長公やらん、甲州武田四郎勝頼と合戦の時、調伏の連歌に、

松たかくたけたくひなきあしたかな

と言ふ発句あり。脇句は、」（ウ一三）

しろくは見へぬ卯の花垣根

かくのことし。かゝる伝授事をしらされは、自ラ不祥不吉を言ひて、我と我身を調伏し、又は不時の災をまねき出す事も侍り。若き者なと、一朝一夕の慰み戯事にもて興する誹諧といへとも、正しき宗匠に問ひ尋ねてすべき事也。いま廿余年さき、ある所、近隣より養子せしに、其席へ招かれてゆきし者共、前句附の一句つゝも仕おほへたる尓、けふの慶賀に発句せはやとて、誰彼二三人物せしを予に見せたる人有しか、三句なから発句脇まて皆々不吉の言葉つかひ、其

上縁語切たれは、我いはく、此養子不縁になる事もやあらむといひしか、纔四五十日も過さるに離縁して帰りしかは、其句とも我に見せし者、不吉の子細を尋ねたる故、物語講釈せむかと思ひしかと、生得」（二四オ）無風雅人にて、理会ゆくましと黙止せしか、その人、其句主、句意等もいまは忘れたり。よし又覚へ居れはとて、まさしく人の恥辱あやまちを事顕さんも無下にはしたなくねしけかましき心地すれは、是も亦黙止して尓るへからむか。

〔　　長　類　無
松高クタケタクヒナキ
武田首　無
右表ハ長類（タケタクヒ）ナレトモ、裏ハ武田首（タケタクヒ）ト申所、ヒヾキノ句ト申ス。

白
シロウハ見エヌ卯ノ花垣根
四郎

是モヒヾキノ句ト申。常ノ祝儀慶賀ニ、カヤウノヒヾキ句ハイミ申由。〕（三三ウ・紙貼）

〔明暦三年、江戸大火ニテ三十万人ホド焼死ト申ス。正月十八日出火ノ由。其春、昌程ノ歳旦ニ

満　来
芦辺ヨリミチクルヤ今日春ノイロ
焼フ
汐ノミチテクルヤウニ焼フト言アテラレシト、後ニ心付シ由。

又半井ト養子ノ歳旦ニ
明テ春ヤ来ル鶺鴒ノ酉ノ年
焼ル
是又、ヒヾキ。カヤウノ句ハ、心ヲ付テタシナムヘキコト也。此時モ大火デ人ミナヲトロキタル由也。〕（二四オ・紙貼）

誹諧文字の事

韓文に俳諧体といへる有り。対句等に曲折を専として、少しおとけたる様の作意を交たる物なるに、前にいへることく彼貫之も其漢文に似たる体を誹諧歌と名付られし物とは見えなから、言偏の誹の字を書れしは、いかなる心にか、其子細は知らね共、往古伝写の誤にて、言偏の文字を伝へ来るにや、諸越に和訓にソシルとよみ、誹詩と続く熟字なり。然れとも、ヒとハイとは従来同音の字なる故、配（ハイ）、牌（ハイ）、是等両音也。尓れは言偏に誹諧と書てもハイカイと」（二四ウ）読も非とすへからす。扨人偏に書く俳の字は、字書に雑戯と有て、漢書に談笑は類二俳倡一とあれは、日本にて今世に言ふ、おとけ、軽口、檀林、噺やうの事、俳優の俳にして、ワサヲキの狂言師、豆花類ひの曲折、戯笑の事と見えたり。されは、此俳の字は〻タハフレと和訓せり。俳諧の二字をタハフレカナフと譯言すれは、よく通すへきか。譬へは、

たふとくもあり尊くもなし

と言ふ前句に、

飛ふ鳥を祈り落して喰はれたり

と付て、飛ふ鳥を祈り落しほど奇妙の験者は誠に貴かるへし。其鳥を又食するとは法師に不相応の破誡、貴くもなしと、おとけ、たはふれの理屈をいひかなへたる様の事、俳諧の二字に相当ると言ふへきか。尓るを、いま世の」（二五オ）はいかいは、かゝる理屈を離れ前にいひしことく、俗語の連歌といふ物に成たれは、俳諧の二字は、唯名目はかりにて、句情、句躰は齟齬せる物と言ふへし。さる事を弁へしらぬ支考と売（ママ）僧、十論、古今抄、廿五ヶ條等に、芭蕉始て人偏の俳諧を始め申されての、古池の蛙に目をさまされてのと子共賺しの妄説をあやなし置たれ共、七歳未満の小児のこときはいかひ士は、誠と心得、素より和漢の古事を夢にだも知らぬ俗客、彼支考賊

か高上の論文に驚かされて数十年の訛となれると見えたり。さほと人偏の俳諧を始め申されし芭蕉庵主桃青、存生一代七部の撰集に何とて言偏の誹諧と言字を用ひられしや。正しく其世に出板したる物なれは、伝写の誤ともいひかたからん。かく目の前に見えたる物をさへ知らぬ事か、」（ウ二五）知つても［頑］愚の俗情なる故か、笑らはれもせす、却て笑止千万の世の中也。されは、昔は人偏言偏かゝり〳〵に書しかと、しゐて争ひ論する事もなかりしを、彼考賊か十論以後は頑に人偏を用ゆる故、又一方より古今集の故実とて意地強く言偏を改めぬ（ママ）る者あり。又、彼七部の撰集を拠して理非の論なく人偏をかゝさる人有り。いつれかいつれならむ。迷ひたとりて、言偏も人偏も用ひす、毎度はいかいとはかりかく人も有とかや。左もなけれは、滑稽空戯抔と言事通例也。又、詼諧と書く人有り。詼（クハイ）は〳〵クハイの音にてハイとはよます。奥儀抄、八雲御抄等、九名の中にも詼諧の二字なし。又クハイカイと日本に言ふ事も聞及はす。和書の中にも、見当らす。是は文選の中に詼諧の二字出所有しと覚へしか、不学短才殊更漢字を熟達せさる僕」（オ二六）なれは、細かしき事は知らす。但、字書に詼は調戯也と有て、〳〵イツハリ、〳〵ト、ノフ、〳〵アサケル、の和訓なれは、大抵元録（ママ）以前の風体、又音偏の誹の字と相当に近きか。尓れ共、是等の文字はいまた日本に於て用ひたる先例なけれは、一時の才覚発明とはほむへきや、私事の僻見と嘲り笑ふへきや、達人の評を待へき物也。

そも〳〵、いま誹諧の二字按するに、古今集貫之の言偏は書写の誤か、又貫之の覚違か、もしは又思量有ての事か、歌道の事は歌人に譲りて論するに及はす。いまの世に誹諧連歌と言ふ日には、歌の中に誹諧歌といふ名目有ゆへ、連歌にも又誹連と言ふを始められしは、争はすして然る物から、則古今集の古実にまかせて、字義も出所も詮義に及はす。言偏を用む事、理の当然なるへきか。誤を誤と」（ウ二六）知りなから、改めかへす、その侭に用ゆるを、日本の故実の習ひと言ふ由聞及ひたれは、知らて用ゆるは文蒙不学、知て用ゆるは故実者、両方ともに俗に通するをよしとせんか。芭蕉の始め申されてのことく、傍恥かしき妄説は顔を背けて背中に冷汗、難かしく浅まし。

〔支考といへる売僧〕（ウ二五・みー書込）

〔孝賊〕（ママ）（ウ二五・みー書込）

〔考賊〕（オ二六・みー書込）

季方の事

貞徳翁の御傘以後、花火草、新式等、さま〳〵出たれとも、いまは、たゝをたまき一部に留たることく、扨此外にも種々四季の詞寄セ、家〳〵、人〳〵の思量工夫をかさねて、理の然るへき論多しといへ共、数百千の物々、尓とせさるはいかにせむ。然るに近年、干梅（ママ）とやらむ言ふはいかい士、篋纏輪と言ふ書惜（ママ）を著述して、苧環を註釈したる。天晴希代の一手柄、世上の調法とすへし。押続て、篋纏輪の相違を」（オ二七）改め訂せし春耕か糸切歯の書籍、又々感称すへし。此二部をとり用ひは、大かた誹諧士俗客のよき学文となるへし。又、その糸切歯を再評せし、焼大根は、正事を得ぬ返答の文と見えて、曽て学文の為にはならされとも、是も又考へ見て、篋纏輪、糸切歯の是非を辨へ知るへし。そも〳〵四季の詞よせ、東武の綾太（ママ）と言ふ者か片歌と言ふ事を取立むとせし百夜問答等に、万葉集を拠として、春の龍田姫、秋の蛙等の證文を出せしかとも、是又誹諧に季方といふを定めて、四季をわくる事、其もと立を知らさる故なれは、其理は有ても用ひられす。水仙花は冬季なれ共、僕は生質懶惰のなま皮者故、それ〳〵の手入せされは、終に冬さく事なく、毎年二月頃、暖気に成て、花を開く。然れは、我家にて」（ウ二七）水仙花は春気に用む事、目前の道理といふへきや。さる事にあらす。四方の国々寒

温の気に依ての遅速は論する境にあらす。大むね天下押なへて梅は春、紅葉は秋に極まつたり。花月は四季共にある物なるを、無名の花月は春秋に定め置たるは、連歌の法にして理の上の論にあらさるを以しるへし。尓れは、季方の事は、支考か古今抄なとに数ヶ条発明し置たれ共、是なる時は是にして、非なる時は非なるへし。あなかちに可否を争ふへきにあらさるか、是に付ていま支考末流の輩か恋句を付る時、前句も其恋につれて恋句となるとやらん言ふ者あり。心得難き私事と謂ふへし。無名の月は秋と定めし式法あれは、もし前句夏冬等の句ならは、其季につれて付句の月も夏冬と成へき事、恋句より確なる理なれ共、秋に定めて前句の」（二八オ）季につれさる事、考へ見るへし。然れは、季方の事は、御傘以後、新式、芋環等を以て、通用の式法とする方、然るへからむか。猶又異論は其国、其所、其席にもよるへし。一概にはいひかたきか。

卯三月上旬

狂歌の事

そも〳〵万葉集は、遥古代の物にて、太古より言伝へし歌ともを、奈良の帝の勅定に依て、井堤左大臣橘諸兄公、大伴家持卿両人にて書集給ひしか、後世の如く、歌の可否詞の尊卑巧拙等をわかちて撰たる物にあらす。まして古今集以後のことく姿風体等の吟味もなく、唯三十一語詠つらねしはかりと見へたり。されはこそ、　」（二八ウ）

かうたちのうはらかりをけくらたてん
くそ遠くまれくしつくるとじ

是等の歌はいま世の下賤匹夫ならては、常〳〵の詞にもいひかたき言語なれは、まして歌と言ふ物に於て（ママ）おや。古今集に至て始て和歌雑躰をわかち給へり。尤其以前、古事記日本記等の国史には、さま〳〵の歌有て、其躰の名目わかち置給ひしかとも、奥義抄抔にて見れは、唯乱句躰と言事、尓るへからむか。素盞烏尊八雲の神詠に四妙と言ふ秘説有て、三十一字五句の躰を本拠として、長短混本旋頭の類は、此五句三十一語より別れ出たる雑躰なる事、教を待すして尓り。扨、古今集に誹諧歌といへるは、古代の名目とちかひ、初て貫之の名付られし事なから、公任、経信ことき専識の達人さへ、其子細惶りて評し給はされは、」（二九オ）いま更彼是いはむ事、その恐れなきにあらすといへとも、大むね唐の詩文章に俳諧と言ふ躰あるに准して、歌の体をも誹諧とわかち給ひし事か。其歌の為躰姿詞等を考へ見るに、いま世の誹諧連歌のことく、俗語音語を用されは、大和歌は歌にして、其心詞に理屈をこめし一作意あれは、大やうあらぬ物にも理屈を付て一首によみかなへたる躰と見ゆれは、外〳〵の深長なる意味をこめ、こゝろの優美を感せしむる歌とは違ひ、弁舌よき者の軽口理屈詰のおとけ咄やうの物と見て置へからむか。始め作者はもろこしの俳諧躰に摸したるにもあらす、唯あとなく和歌の心にてよみ置しなるへけれと、後人の貫之といへる多才の歌人、その躰をわかちて誹諧躰と名付られし物なれは、賤しき風情姿詞等にはあらさるへし。」（二九ウ）尓れはいま世にいへる狂歌体ともいふへからす。扨、近年もて興する狂歌と言ふ物、大かた此誹諧歌の躰よりわかれ出たるらむとは思へとも、狂歌と言名目いつの世に何と言ふ人のいひ出せしか、何と言ふ書籍に出所確なる證文ある事かしらす。六百番の歌合やらむに狂歌といへる事有しかと覚へぬれと、是を始とも定めかたし。大かた此歌合の以前よりいひ習はせし名目なるか。さる故に年久しく尋ぬれ共、知る人更になし、つら〳〵思惟するに、仏語の狂言綺語より出たる名目にて、狂歌とは名付しか。但シ誹諧歌九名の中の狂言躰よりいひ出せしか、ふるき昔より人の口にいひ伝へしを聞に、音訓雅俗の差別もなく、三十一字五句につゝりて、あると有りふる物事に付て詠つらぬるをきけは、とろくさい青鬼も

牙をむき出して感し笑ひ、いかなる偏屈親仁も」（三〇オ）臍を取失ふほとおかしき事共なれは、誠や、狂言歌といひて、然るへき風情なれは、狂言歌と言ふ名目尤の事にそ思ひ侍る。さる事も何百年か伝へきて、漢土の詩経にはあらて、時の政務のよしあし、或は人をほめ、或ひはそしり悪口するにも、誰かいつくにて作りしとも知れす。落書やうの狂言共、日本六十余州にみち〳〵たれ共、此狂歌といふには式法もなく、伝授習ひと言ふもなく、言語の尊卑をもわかたす、姿詞の穿鑿も入らす、唯三十一語を五句にわかあちて上下首尾能いひかなへ、一首の理屈調ひたるを作意の手柄とのみして、是も日本風俗の一体と成て有しを、近年は何かたの誰よりか初まりけむ。狂歌にも宗匠と言ふ有て詠方の風体にも子細有事のやうにいひなし、たま〳〵よみ得たる歌ともを彼ノ」（三〇ウ）輩に見すれは、是はよし、彼は狂歌の体にあらすなと言ふもの有り。[至て]心得かたき事共也。狂と言ふ字に、式作法有へき也。大和歌は常の人にして、狂歌とは歌の中にて狂人共言ふへき名目なるに、狂人を捕へて是は狂人なり、彼は狂人ならすとて、常人のことく取扱ふへからむや。去なから、此事考へ見るに、むかしの誹諧連歌のことく、おもしろくおかしき作意、いひかけ、言ひもしり等の事は言ひ古し、たま〳〵我たくみ出せしとおもふ事も、古き書籍の中に似寄たる事もあれは、骨折てせんなき心地もするそかし。さる物から、誹諧も連歌も狂歌もいにしへの姿はうせてなく成り、今世の狂歌と言ふ物は、是も畢竟音語俗語の大和歌といひて尓るへし。さらは、狂歌の狂の字、誹諧連歌ふたつともに名のみ残りて本体は失たる物也。伊勢の守武」（三一オ）やらむ、世の教誡の為に詠置し百首の歌も、雅俗の差別なく、下賤民間の詞を其侭に用ひたる物にして、さしておかしく狂したる躰も見えす。され共、本歌と言ふへきならす。又誹諧歌と言ふにてもなく、名付かたなきまゝに、狂歌とのみ言伝へたり。尓れは、今世の狂歌よみといふ人のよみしを見るに、十に三つ四つは狂したるおかしみもなく、俗語の侭の大和歌なれは、ひなふりとも名付へきならねは、今よりは俗語歌とか流言歌とか呼ひたし。しかしなから、狂歌体とて、いつれにか、近年式法の有るよみかたの習ひもある事に成しにや、井中の蛙いまた大海の様子を見も聞もおよはす。もしあらは狂歌とは言ふへからす。但シ、数年の巧者、天性の達人有て、同し狂歌もよみかたの巧拙は有へけれ共、是は狂歌の躰にあらねは、狂歌とはいひ難しと言ふ人に」（三一ウ）強て尋たきは、狂歌にあらすは何歌と言ふ物そ。聞かまほし。由縁斎貞柳かことき天性生得一世の上手とこそ言ふへけれ。狂歌に習ひと言ふ事、いまた知らす。もしあらは、行て学ふへし。あなかしこ。

天明四年甲申五月下旬清書之

河向ひの削かけ

ある日、一童子来て問ていはく、何国の誰にてかありけん。東武浅草観音堂の宝前とやらんに、かけ奉りし狂歌のよし。」（三二オ）

磨たら磨たゝけに光るなり
性根玉ても何の珠ても

古は宝珠を絵かき其傍に此歌を書たる由。尓るはいかなる子細に依てか、輪王寺法親王聞及はせ給ひ御褒美有けれは、其時又詠るよし、

有かたや我は琥珀のそれなから
玉の御影にあかる塵の身

かくつらね奉りしとか。何さま狂歌には勝れたり。堪能の人と見えたり。

されは、此磨たらの狂歌、当国熱田の神前にも右の通り絵馬をかき、其傍に此歌を書て置たる所に、数年の間、誰彼参詣多き中に、歌道熟達の好士有て、此歌を打眺め、惜むへし、天尓波をたやかならす

と眉をひそめ」（三二ウ）たるよし聞及へり。我等つら〳〵考へ見るに、いつれ手尓波違ひしとも見へす。其趣意よく聞へてあるに、彼参詣の人の詞甚訝し。いかなる事そ、足下我をさとせ。答て、一通りうかと聞かは、さはかり違ふ所なく思へ共、聊論も有へき歟。委しく説て聞かすへし。

そも〳〵和歌の道は、本朝自然の物にして、漢土異国の教を待す。天性の国風なる事、言に及はす。尓れ共、近年元文以後の人物は何事によらす、薄情に成て、諺に言ふいき過の輩多き故、かく細かしき手尓波等の事を吟味する人なきと見えたり。心に思ふ事を纔三十一語にいひ課る事なれは、一字一語の天尓波も置様にて大に相違する事あり。品によつては其作者の心と齟齬する事も侍り。まして、清濁の仮字遣ひに依て表裏する歌道に」（三三オ）よらす。俗談とても然り。先ッ右の狂歌の趣意を按するに、玉と言ふ物は、磨けは磨くほと其光り明かになる物なれは、真、其ことく人倫の徳光も藝術も、磨き〳〵て鍛錬思惟すれは、其功弥増になると言ふ譬へ成へし。左あらは、

磨ては磨たゝけに光るなり
精根魂ても何の珠ても

かく有へきか。是当然の意也。上五文字を本行の歌のことく、磨たらとをかは、

磨たら磨たゝけに光るへし
性根霊ても何の玉ても

是は未然を察する意味也。是にて天尓波落着すへからむか。本行の心は、元来の玉なから、猶其工を、磨たらは磨たゝけの功顕はれて、光り増したると言ふ事成るへけれと」（三三ウ）、とてもの事に此心を慥に句作らは、

磨ほと磨たゝけに光るなり
精念魂ても何の珠ても

かく句作るへきか。是亦当然の意、但、本行の歌も手尓波は強て難する所なき様に見へなから、其歌主の趣意いひ課せさる所あるは、則手尓波のつかひかた尓と定まらさる故なり。

磨たら磨たゝけに光るなり

とは、正しく眼前に見たる句情にて、当然の意味也。

性根玉ても何の珠ても

とは、未然を推量する句作故、上下連続貫通せす。

磨たら磨たゝけに光るへし
性念霊てもなにの玉ても」（三四オ）

かく言はゝ、上下句ともに未然を言て、珠の徳をあらかしめ論したる句情なり。

磨たら磨たゝけに光るなり
精根霊ても何のたまても

とは磨て後の句情なれは、既然の意味と知るへし。

又問ふ。尓らは、強て作者の誤にはあらさる歟。

答て、其境ひは、作者の心に有て、外より評しかたし。字面の尓にて一通り聞ふれは、流石に誤共言ふへからさるか。又問ふ。然らは、何方か天尓波違ひしや。答て、日本の語は、古代の国史、万葉集等にて言分ヶ、鏡明□る事也。又、言語の事は自語後語の差別有。さらは、此歌を古代の書様にていひ聞すへし。」（三四ウ）

磨而有者磨而有麁細仁光有（ミカイタラ　ミカイタタケニヒカルナリ）
精根霊而母何之玉而茂（シヤウネタマデモナニノタマデモ）
磨而有者磨而有大小尓可光（タラ　タケニベシヒカル）
雖二性念一雖二何之玉一（デモ　デモ）
磨而者磨而有浅深仁光也（テハ　タケニ）
雖二精念魂一何乃珠而母（デモ　デモ）

磨大小磨而有厚薄仁光有
精根霊天裳何等能玉而茂

かくのことし。理会したか。小子又問、而有者の書様、心得かたし。いかゝ。答て、通俗に〻タラとはかり、略して言ふに二ッ有。され共、文字の書様は、一ッにして読みやう言様に二段有り。汝等」（三五オ）ことき童も常〳〵口にはいひわけ、耳にも亦能く聞わくるにあらすや。左のことく然りと知るへし。

タレハ　テアレハ
而有者
テアラハ　タラハ

テアの切也。タにして又テアの拗音を一口に縮めていへ は、タの直音となる事、天性自然也。尓れは、磨而有者を直音に縮れは、則、磨而有者となる。亦、此〻タレバのレバの二語を縮れは、テの一音となる。

ミカイタラ　ミカイタレヤ　ミカイタレハ　ミカイテアレハ
磨而有者
ミカイテアラハ　ミカイタラハ　ミカイタリヤ　ミカイタラ

常〳〵俗語に磨たりやと言ふは、則レバの二語を一口に縮めて拗音にいへは、〻リヤの音となる。〻取レバを〻トリヤ、〻ヤレハを〻ヤリヤ、のことし。扨、此〻レバ〻リヤなどを直音にすれは、ラとなる。さるに依て〻磨タリヤの語、則〻磨タラになる。是は磨て後の語也。又書様は一ッなれ共、左の仮字の相違を見るへし。扨又、常〳〵俗語に同語にして」（三五ウ）自然と未然と当然と既然とのわかる事、是又日本の天性也。譬は、汝らことき小子に対し、コリヤ〳〵童共、此手水鉢は殊の外によごれた、磨たらよからふと言ふは、磨而有者将レ善と言ふ語也。其時汝等意得て磨立て、いかにも磨たら奇麗に成候と言ふ此磨たらとは、磨而有者奇麗に成候との返答にて、自他の差別を口には言ひ分ヶ、耳には聞わくれとも、目に見る所は同字なるゆへ、和語の仮字付なけれは、わかり難し。是、其もと日本自然の物にして、文字は異国より入来て、此土にて飜訳せる故也。されは、

磨而有者可レ光　未然を推量る言語
磨而有者光ル也　当然既然目に見る所

尓れは、右本行の歌〻磨タラとは、〻磨テアレハ、磨タリヤ」（三六オ）〻磨タラの心成へし。〻磨テアラバ、磨タラバの心に解せは下の五文字落着すへからす。此両様の聞違ひすれは、手尓波をたやかに治らす。然れは参詣の中には批判する人も有へし。麁忽には解し難し。

（磨たれは光るなり　磨たらは光るへし）　（当然　未然）　此差別を知るへし。
（磨たらは光るなり　磨たれは光るへし）　（是にては落着せす。能々理会すへし。）

童子頭を打ふつて、いよ〳〵難していはく、本行の歌の〻磨たら、の詞、〻磨たれは、にしても、〻磨たらは、にしても、何とやらん語路の調子しかとせす。今少し細かに聞たし。答ていはく、いかにも左思ふは、理り至極。下の句の〻性根玉ても何の玉ても、といへる、〻でも、のて文字故也。前に書て見せたる」（三六ウ）〻でも、の語は、雖もの字にあたゆへ、調子定まらす。扨、又此〻で、文字のべていへは、〻にて、に通ふ、〻扇であふく、〻扇にてあふく、〻是でよし、〻是にてよし、此類ひ也。尓れは、性根玉にても、何の玉にてもと言ふ事にあたる故、調子あしく聞ふる也。此歌、〻生根玉も何の玉も、といはゝ、上の句〻光る也、の語と相当すへし。〻でも、は未然の詞、〻光るなり、は当然故也。尓れ共、言語の数揃はさるゆへ、〻玉でも、とでの字を加へしならん。紛らはしくして聞わけかたき手尓波なり。

磨たら磨たゝけに光る也
精根の玉も何らの珠も

右は是当然の意味にて、調も能く聞ふ。

磨たら磨たゝけに光るへし
性根玉にても何の玉にても

右は未然推量の意味なり。」（三七オ）

磨たら磨たゝけに光る也（タレハノ心）
　穢れし玉も悪性根玉も

右のことく句作りたらは、論もなかるへし。

此上の句〻光るへし、にては、〻でも、の語かけ合ふ所能々思惟すへし。去なから、かく細かしき事を知らぬ人も、日本自然の歌道なれは、打聞たる所、何となく調子あしきゆへ、天尓波違ひしと言ふならん。手尓波は大事の物なる事、是にて知るへし。句意句情落着せさるは、此故と知るへし。童子諾して帰らんとする時に暫しと呼と、めて謂ていはく、彼歌に付て我も一首飜譯して聞すへしとて、

　磨ても磨たゝけに光らぬは
　　おはもじなからをれかきん玉

右は去ル丑年六月草稿し置たるを、今年亦閑暇有」（三七ウ）しまゝ、改め清書せしものなり。

天明四年辰六月九日

」（三八オ）

（白紙）

」（三八ウ）

誹諧評論

むかし天竺に仏法を立て、人を導き教へ給ふに、開権顕実とかやいふ事ありて、経文のおもてには作りこしらへたる偽りかさり多くあれ共、是は道を広むるの方便なるよし、即法華経に方便品とて、種々のいつはりを書れたるは、彼の国の人はもと強悪にて、はしめより倍実の教にては治りかたき事を知り給ひて、四十九年未顕倍実とかや、御礼は国の気風によりてはいろ〳〵の治めかたきあるへきなれと、仏法の方便は、唯其国の立派なれは、よしあしを論するには及はぬ事也。然に、日本は神世より人の正直丁寧なる国」（三九オ）なれは、開権方便の沙汰にも及はす。何事も正道をもて導さとし給へる神道の教なるよし。されとも、神の道の事は我よくしらぬ事なれと、むかしよりの教かたを見るに、少しもいつはりかさりたる事はなし。しかれは、其末に出たる連歌誹諧とても、人を導き教るの筋はよろつ日本の道にしたかひて、正道正直の外はあるへからす。

○むかし誹諧の達人に伊賀の芭蕉といふ人あり。此人、歌道を本として、世に正風の誹諧を教へたる、この道の大徳也。されは門弟三千もありし様にいふ人あれ共、さほとの事にもあるましけれと、是は師の徳をかゝけんとて、孔門三千の沙汰に習ひ、あるひは門弟をのれ〳〵か身持上をするとて、誰〳〵は蕉門の」（三九ウ）十哲なとゝ、是亦孔門の沙汰に習ひて、芭蕉の本意にもあらぬ事をさま〳〵といひふらせり。もと芭蕉の誹風は、和歌の実義を本とするゆへ、京大坂の虚花の人にはあはすして用ゆる人もなかりし故、京の門人唯三四人、大坂とても二三人、其余はみな〳〵いなか人也。三千はしらね共、五百も七百もありつらむなれと、多くの中にて芭蕉の本意にかなひたる人は、旧友素堂に、門弟にては、去来、丈草両人なり。其角、嵐雪、高弟なれ共、篤実ならす。芭蕉僊化の後に至ては、其角流、嵐雪流、許六流、支考流なとゝ、面々流義の名を立て、師の誹風を崩したる中に、大罪なるものは、美濃の支考姦賊なり。此者は蕉門の末弟にて、さのみ稽古もなく、」（四〇オ）修行もなく、勿論芭蕉の教化にも預からす。唯弟子といふ名はかりにて、芭蕉は元禄七年の僊化にて、其後三十年も過たれは、其角、嵐雪、去来、丈草、其外の門人、歴々の者共は残らす死果たる時に、支考は芭蕉に三四十年計りも生延て今ははせをの直弟子も残らす失果たる跡なれは、諸人も支考を直指なりともてはやし、其身も今はおそろしきものもなきゆへに、日本国をかけめくり、諸国の人を鼓動させし也。支考、年齢何ほとにて死たる

はしらね共、後には東花坊を蓮二坊とあらため、亦其弟子の白狂と化て、ひとり享保の末頃迄生延たれは、芭蕉の誹諧を我物にして、種々さま〳〵の謀計を工み、無慾のふりて金銀をむさほり、」（四〇ウ）芭蕉の誹諧を破りたるは、此者一人の仕業也。しかれ共、東国西国遠国の人々は、支考か内證の謀計はしらす。古今抄、十論なとの文章を見て、其才弁におとろかされて、芭蕉にかはらぬ上手なりと心得、三千の門人の中にも、是にたてつくものはなしと思ひ、ひた倍しに倍、仰を尽すは、すへて弁舌にのせられたるおろかなる人々也。我、尾州に生れて、此道を好〻たれは、ある人の弟子となりて、多年獅子門の俳諧を習ひたれ共、支考か謀計に倦果て、今は此道をやめたれとも、あたら芭蕉の誹風を崩したるつらにくさに、我年来聞ふれたる支考か謀計を書あらはして、遠国の人々にしめすもの也。

○世に俳諧新式、二十五條といふ物、芭蕉の作とて」（四一オ）伝本あれ共、是全芭蕉の直作の書にはあらす。支考、後に俳諧の書を作りて板行に出さんとて、先ッ此二十五條を作り、芭蕉より相伝の秘書なりとひけらかして、門弟へ伝へたるよし。師匠ひそかにある時の物かたりなりし。

〔此二十五條ト云書ハ全ク翁直作ニテナシ。支考作ナリ。百蘿若年ノ時ニ義仲寺ニテ雲裡坊ノ門人トナリテ居タルニ、此二十五条ヲ、雲裡坊、是ヲ写シ置ヨトテ出サレタリ。其時ニ雲裡云ヘルハ、是ハ翁ノ作ニテハナシ。支考作ナレトモ、翁ノ作ト心得テ見ルヘシトテ出サレタリ。又、京都望月宗屋ト云人モ、是ハ支考作ナリト云テ伝ラレシ也。」（四一ウ〜四二オ・書込み）

○芭蕉門弟三千人といひ立、其中にて、器量なるを撰〻、是を芭蕉か十哲といはれたる様にいひふらせとも、是亦支考か仕業のよし。師匠ある時の物語也。此謀計は十哲の中へみつから支考を書加へて、僭上のためにしたるもの也。

○続猿簑（ママ）と言ふ俳書あり。何人の撰ともしれす。いつ頃出来たる物ともしれす。芭蕉僊化の後、伊賀上野芭蕉の兄、土芳といふ人のもとにありしを、」（四二ウ）書林井筒屋か所望して板行に出せしよし。即井筒屋か奥書ありて、さなから芭蕉直作の様に思はせ、中に所〳〵墨消の句なとありて、いまた草稿の書なれ共、一字一行をたかへす其ま〻に板行したりと、いとも井筒屋か丁実なるやうに見せかけたり。支考といふもの、人をはかる事の大上手なれは、井筒やと蜜談して人のいかにもと感心する様に仕立たり。書林はもとより書を売弘めて利を得る事を好むもの也。支考は後の光にせんとてたくみなせる事なるよし。是亦師匠の物語也。後の光りになる所は何れそといふに、此うちに芭蕉時分の歌仙五巻あり。後の二巻の連中には支考を出せり。これ支考か名を出し置て後の光りにせんと也。又」（四三オ）此時の発句に「猿蓑にもれたる霜の松露哉といふ句あり。おかしき事也。是、続猿蓑といふ名を人にたしかに思はせんとの謀計也。此五巻すへて支考独吟なるよし。是又師匠物語也。又五巻目の歌仙に、今宵ノ賦といふ支考か序あり。是又後輝にしたるもの也。又、芭蕉名月の二句に、支考か評を書たるあり。是また後輝のためのこしらへ物也。支考は芭蕉の句にさへ評をしたる人なれは、限ある人なりと後世の人にも思はする為の姦計也。芭蕉生前に素堂、其角、去来なとをさし置れて、末弟の支考に評を書せられふ様はなき事也。此外にも謀計数々あり。此続猿といふ物は、一体支考か作物なれは、こと〳〵く評するに及はす。」（四三ウ）

〔続猿簑（ママ）、翁直撰ノ書ニテハナシトアレトモ、是ハ松浦心得違也。其故ハ、去来ノ遺稿ト云書ニ、名目見ヘタリ。支考カ偽作ナレハ、去来ノ書中ニ此名目アルヘキヨフナシ。腫物ノ柳ノ句ハ、浪化続猿

両集ニモ出サレシ故、今小文庫ニ出ストアリ。然ハ、翁生前ノ集ナル事、異義ナシ。但、翁生前ニ板行ニ出タルニハアラス。迂化ノ後、書林井筒屋板ニシタル書ナレハ、其時井筒ト支考ト蜜談シタルコト有シカモ知ラス。」（四二オ～四二ウ・書込み）

○芭蕉在世の撰集に支考と言名なきは、此もの遅く入門せし故也。芭蕉にしたしく附そひたる人にてはなし。入門ほとなく芭蕉は死去也。道の事は、跡にて去来、丈草両人より聞たる人なり。何事も芭蕉より直にくはしく相伝を得たる人にはあらす。其證拠は芭蕉死去より廿四年過て、享保三年に本朝文鑑といふ書を作りて板行せり。是に芭蕉の吉野紀行あり。此紀行の中に、摂章公の詠めにうばはれといふ事あり。支考註に、此摂章といふは誰の事かしらすとあり。支考、何事も芭蕉より直に聞た人ならは、此の摂章の二字も誰といふ事明白にあるへきに、芭蕉の文章にある事を、其弟子かしらぬといふは、何とも云訳のたゝぬ事也。　」（四三オ）

○芭蕉死後三十五年過て享保十四年に支考古今抄を作りて板行せり。是に芭蕉直作の序文あり。しかのみならす、本文大段はすへて芭蕉直作の文言也。是皆支考偽作したる物也。決して信用ならぬ物也。我此いつはりに倦果て獅子門を見限て俳諧をやめたる也。

○東花坊といふは支考事也。然るに東花坊弟子に蓮二坊といふ者あり。是何者そと問ふに、やはり支考事也。又其蓮二坊弟子に白狂といふ者あり。何者そと問ふに、是又やはり支考事也。しかれは、唯一人の支考か東花といふ時は師匠に成、蓮二坊といふ時は弟子に成、又白狂といふ時は、孫弟子に成て、吾流義を我とはやし立たる謀計也。役者の」（四三ウ）冨十郎か七化（ナバケ）の狂言に似たるにや。

○芭蕉死後二十五年過て、享保四年に俳諧十論、為辨抄なといふ書を作りて出版せり。是等の書一体芭蕉の旨にあらす。悉支考か自見の筋なれは、評するには及はぬ事なれ共、芭蕉大坂にて大病の節、近方の門人は大かた集りしに、去来代筆のよしにて、遺書十通ありし。此十通の書置、支考請取て、支考か手前に三十年秘し置たれとも、今世にあらはすとて板行に出せり。其十通の内に、草庵の出山仏と古今伝と百人一首秘聞抄は支考へ可被遣候とあり。是、後の光僧上にせんとて書入たる文也。此度支考前働おとろき入候とある。是、芭蕉直筆にて、前後働といふ後の」（四四オ）字を書おとされし物と見えて、命終期も近きに落字こそ却て殊勝なれと書たる。是又上手に作りこしらへたるは、近松門左衛門同作なり。其上、此十通の書置は十人の人々へそれ〳〵の名当有て、其人々へ届物なるに、支考不残横取して、三十年の間手前に秘し置たりと書たるは、扨も〳〵あたらぬ事にて、弥それに相違なけれは、人々への届ヶ物を横取したる盗人の類ならん。是は何といふらちもなき事そや。是にて芭蕉の書置はこしらへものなる事明白也。

○支考作に論語先後抄といふ物あり。儒者を立るものならはさもあるへし。誹諧師にて論語の註釈はいらぬ事也。是等もすへて僧上の為にしたる」（四四ウ）ものなり。

○芭蕉生前の句集はすへて誹の字也。是代々の勅撰にしたかひ歌道を本に立られたる篤実の筋にして、かりにも人偏の俳の字を書れたる事なし。それゆへ、其角、嵐雪、去来、丈草、許六、野坡等に至る迄、すへて誹の字を用て芭蕉の本意にたかはれす。然るに、支考ひとり言偏をやめて、獅子門一派の類はすへて人偏にあらためたり。しかのみならす、是も我かあらためたる咎にせす、二十五條、古今抄に芭蕉の文を作りこしらへ、今人偏に改たるは、芭蕉の業の様に書なして、其世は勿論、末代の人までを偽はらんとするは、すへて支考か謀計也。芭蕉か兼々人偏に書たしと思はる、心ならは、先我在世の集に是を書あらため、其角、」（四五オ）嵐

雪なとも、是に同心し、去来も許六も、皆〳〵人偏に同心して、翁の本意にしたかふへき事なれ共、芭蕉は映して人偏を書ぬ心ゆへ、高弟も其本意を兼々聞れたる事故、一人も人偏をは用ひられす。芭蕉も終られ、古門人も残らす死果、今は天下にははかるへき人もなき時節を伺ひ、人偏に書あらためて獅子門と言ふ一派を立て芭蕉の誹風を崩したるものは、全此考賊なれとも、我発見の新流義と言ては、諸人信任せぬ事なれは、やはり芭蕉を本尊に立て、何事も芭蕉より相伝せし様に天下の人を偽りたる謀計也。我等此道はやめたれとも、此道におゐて信すへきは、芭蕉一人也。此外の者は一人も信すへきはあらす。殊に支考、露川なと」（四五ウ）の類なるものは、此道の売僧也。誹賊也。たとへは、文筆の達者にて弁舌に人をおとろかすとも、心法は姦賊なり。唐土にても、楊子、墨子のともから、一たひは名を鳴かし、天下を皷動させて一派を立たれ共、孔子の実学から見る時は、異端道賊の輩なれは、今日本の儒者とても楊子、墨子を尊信する者はなし。支考、露川なとは、即蕉門の楊墨也。才子なれ共、信するにはたらすとや。昔、文和延文の頃、二条家の末流大納言為兼といふ人、殊の外の才子にて、天下大かた此人の門弟と成、殊に定家卿の曽孫なれは、人も一かたならす信仰して、大に名を鳴らされたれ共、万事定家の掟に違ひ、変風異端の一見識を立て、正風を崩されたるゆへ、終に関白良基公、是を奏して」（四六オ）為兼をは遠嶋にうつされ、頓阿法師を宗匠として再正風に戻されしとかや。為兼も諸人に勝れし抜群の才子なれ共、今世に為兼を用せる人は一人もなし。人、何ほと才弁なれはとて、不実謀計なるは、君子とはいふへからす。歌道に為兼、誹道に支考、共に是風雅の道賊也。

○家職を捨て、誹諧師と成、一代切にて身を果すは、先祖に対しての不孝者也。それも二男、三男に生れたらは三界無庵の風雲に遊ひ、一所不住の身となるとも心次第の事なれ共、誹諧の為に家を汚して子孫を絶するは、道にあらす。芭蕉は伊賀の産にして、藤堂家の臣なれ共、家を継へき人にあらす。兄に土芳といふ人ありて、芭蕉は二男部屋住の人なれは、何に成共」（四六ウ）心次第なり。殊に病身なる人なれは、仕官懸命の地も望なくして一所不住の風客とはなれり。ゆへに妾もなけれは子孫もなし。一代切に果されても先祖へ対せる不孝にもあらす。然るに此人の門人に尾張に露川といふ者あり。此者は、一子にて家を継へき身なりしに、若年より家職を嫌ひ、明暮誹諧に遊ひて財をついやし、終には貧窮となり、風雅のさびをうれしかり、芭蕉の菅蓑檜笠をうらやみ、後には生国尾張にも住かねて、家を失ひ、先祖を捨、親族のしたしみもはなれ、朋友の交りも絶て、いつしか誹諧師とさまをかへ、風雲行脚の身となりて、行衛もしらす失果たり。誹諧に入過て雲助同様の身となりし者、此外蕉門にもあまたあり。二男三男にもあらす」（四七オ）して、かゝる境界に成くたるは、あまりほめたる事にてはなし。

○去来嵯峨に世をのかれて一生此道をたのしめり。子孫なくして一代切なれ共、此人も芭蕉とひとしく、長崎向氏の二男なれは、家を継へき人ならねは、さもあるへし。丈草、支考は、もとより沙門なれはさもあらん。唯、侍農工商の家長に生れ、家を立へき身分として、誹諧に入過ては、家職を失ふはよからぬ事也。我も本松浦の家に二男なれは、あなかち家業を立るにも及はす。芭蕉の風雲をうらやみて、何とそ誹諧師にならんと思ひ、獅子門の人の弟子となりて、より〳〵此道を修行せしに、兄文節不幸にして業を継へき人なけれは、誹諧師の望を」（四七ウ）やめて先祖の医業を相続せり。好たる道なれは、行余力ある時は、是を忘れす、三十余年稽古して、人にもしらるゝほとには成たれ共、十論、古今を

熟達するにしたかひ、支考か虚説に倦果て、美濃流をは見限りたれは、今より芭蕉一流に帰して、美濃尾張の誹諧を再正風に立直さん事をおもへとも、旧染の垢（ケガレ）しみ込て、たやすく洗浴することあたはす。殊に家業のいとまもなく、齢いと闌にして、気力なけれは、むなしく光陰を過すのみ。さるを今幸なるかな、出雲国に和学先生ある事を伝へ聞て、多年著述せし愚書数巻を送り、是に校合を加へ給ふて神庫に寄納あらん事を希ひ、かつは誹諧の事におゐては年来の蓄憤を書記して」（四八オ）貴国に再芭蕉風をも発し給ひてん事をすゝめ奉るといふ事しかり。

尾州　松浦文泰

天明四年甲申十月

雲州

広瀬先生足下

此一巻は尾州名古屋の人松浦文泰といへる医師の作也。いかにして予か愚名を伝へ聞れけん。校考せよとて手書して送りこされ侍る。こゝろさしふかきおのこと見えたり。書中あやまれる事もあれとも、まゝ又確論も多けれは、捨へきにはあらねと、当時獅子門信仰の人にはさしさはる事もあまたあれは、他見をはゝかり、唯家書として窓外には出すへからす。」（四八ウ）

（白紙）」（四九オ）

（白紙）」（四九ウ・終）

〈付記〉

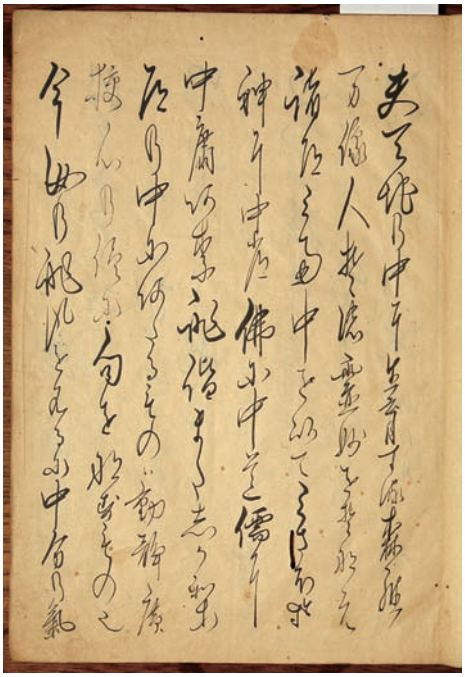
本稿をなすにあたり、手錢家の皆様には特段のお世話に預かりました。また、手錢記念館の佐々木杏里様には、細部にわたり懇切なご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

本稿は、拙稿「季硯句集『松葉日記』―手錢記念館所蔵俳諧資料（一）―」（『山陰研究』第六号、二〇一三年一二月、島根大学法文学部山陰研究センター）、同「翻刻・手錢記念館所蔵俳諧伝書（一）―手錢記念館所蔵俳諧資料（二）」（『湘北紀要』三五号、二〇一四年三月、湘北短期大学）、同「百蘿追善集『あきのせみ』―手錢記念館所蔵俳諧資料（三）―」（『山陰研究』第七号、二〇一四年一二月、島根大学法文学部山陰研究センター）に続く、島根大学法文学部山陰研究センター山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の公開に関するプロジェクト」（二〇一三～二〇一五年度、代表・野本瑠美）、国文学研究資料館基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」（代表・大高洋司）、科学研究費補助金（基盤研究（C））「「人を結びつける文化」としての俳諧研究」（研究課題番号26370259）（代表・伊藤善隆）の研究成果の一部である。

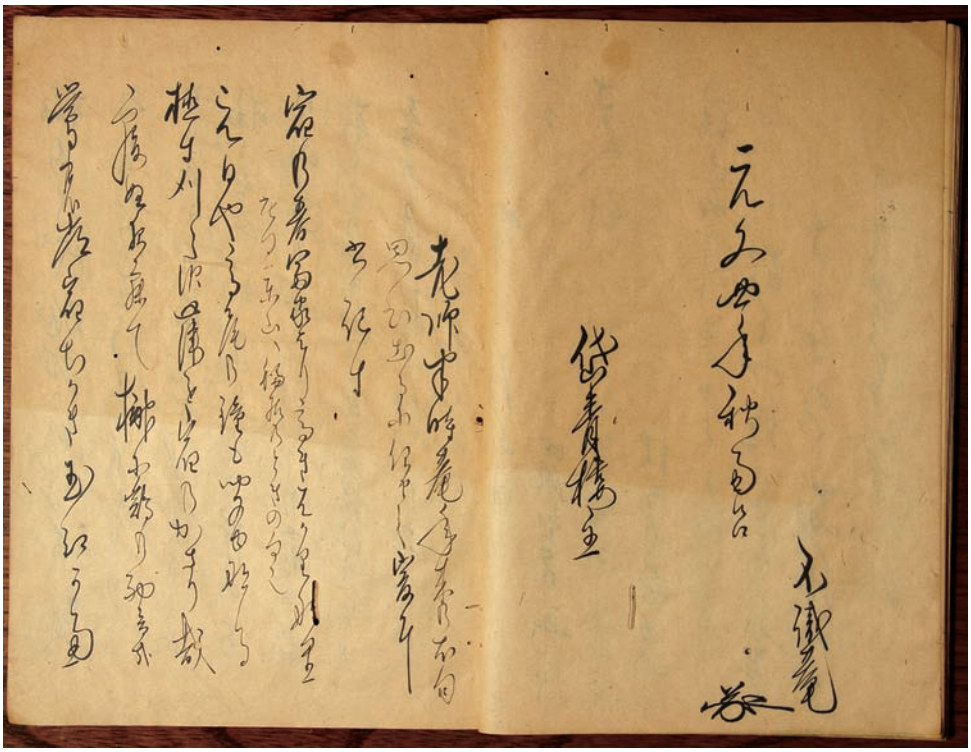
〈参考図版〉

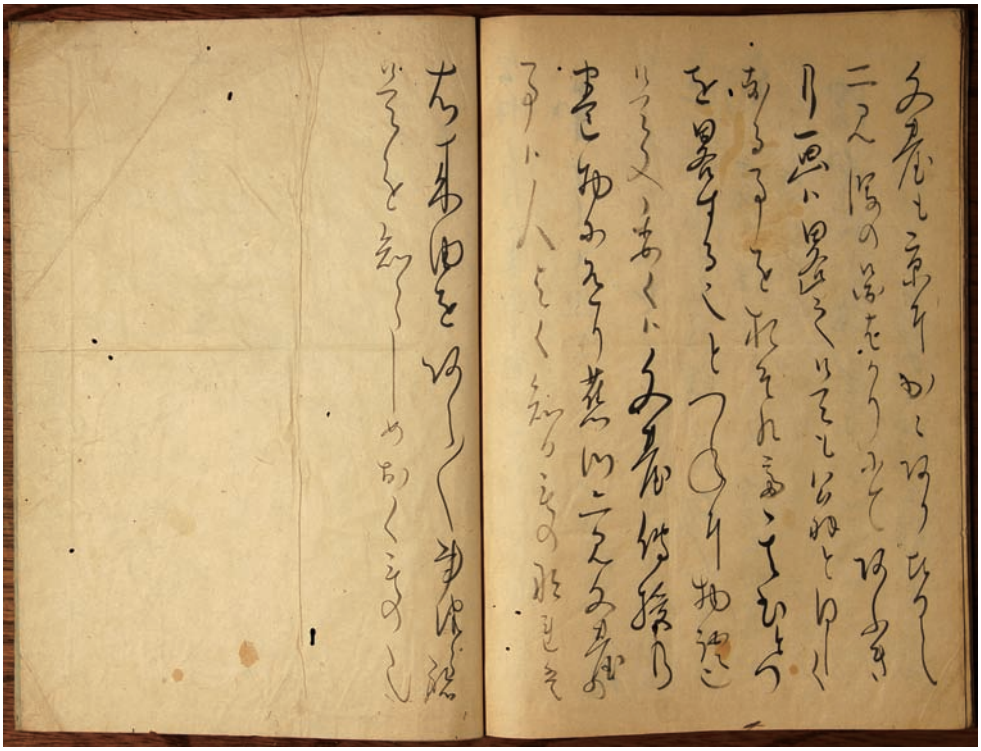
1.『俳諧すがた見』表紙

2.『俳諧すがた見』巻頭（オ一）



3.『俳諧すがた見』署名（ウ八・オ九）



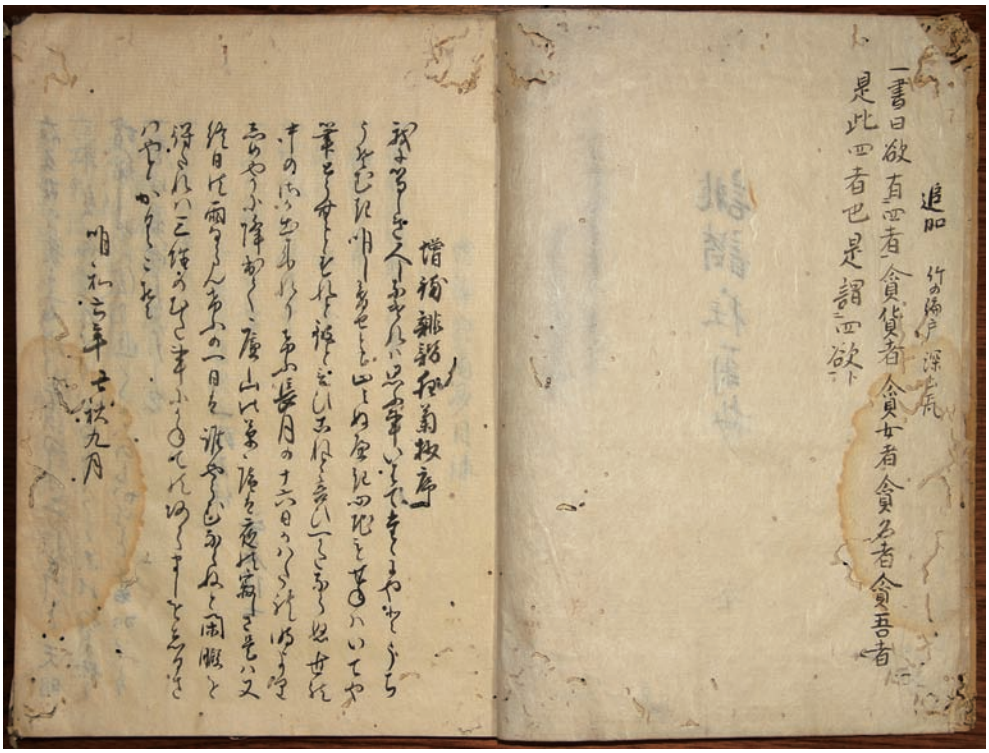


4．『俳諧すがた見』巻末（ウ・二七・オ・二八）

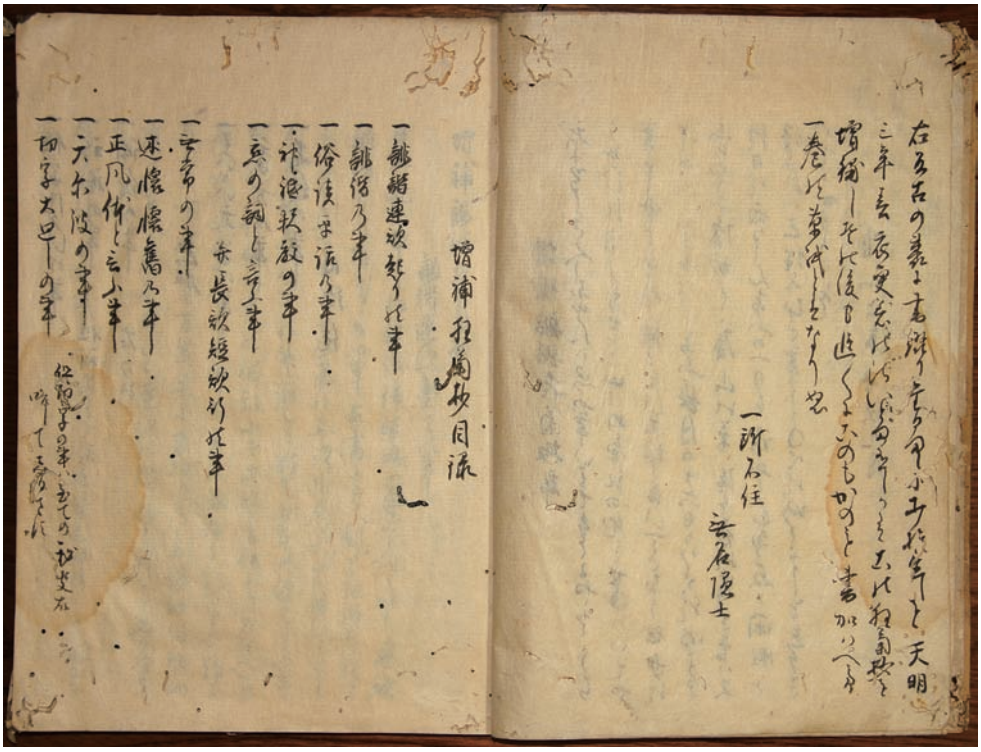
5．『増補誹諧狂菊抄』表紙

6.『増補誹諧狂菊抄』表紙見返し・扉オ

7.『増補誹諧狂菊抄』扉ウ・序オ



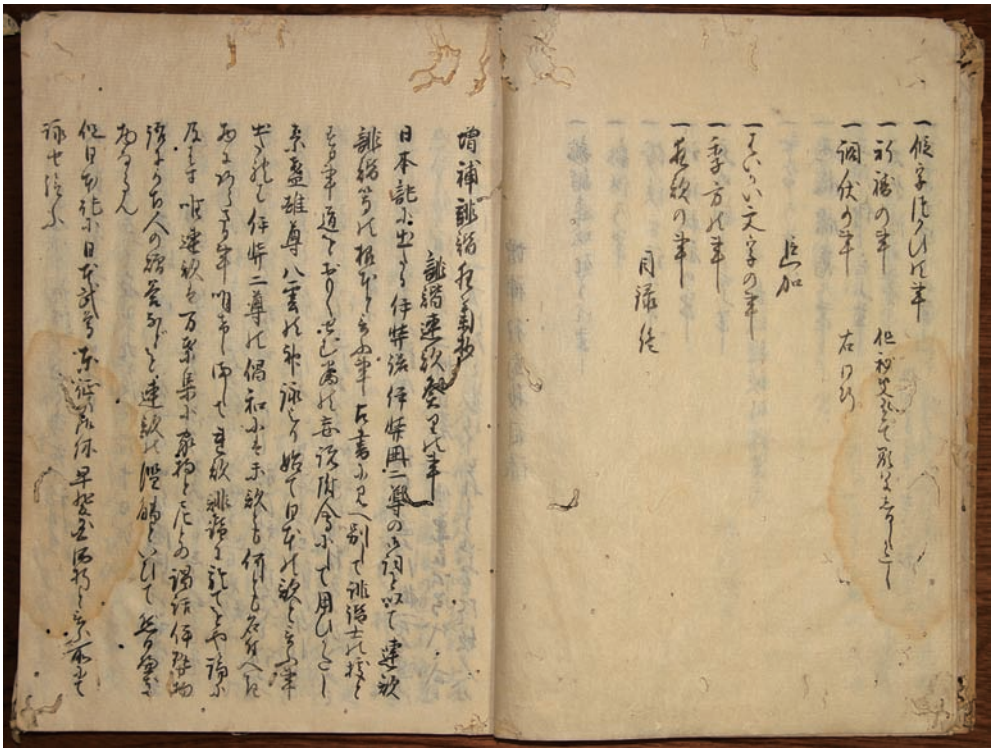
8.『増補誹諧狂菊抄』序ウ・目録オ



増補狂菊抄目録

一誹諧連歌発句の事
一誹諧の事
一俗語の事
一神祇歌の事
一恋の部の事
　　赤長歌短歌付狂歌
一雑の部の事
一連歌の事
一正風体と云事
一天下泰平の事
一切字大口の事

9.『増補誹諧狂菊抄』目録ウ・本文巻頭



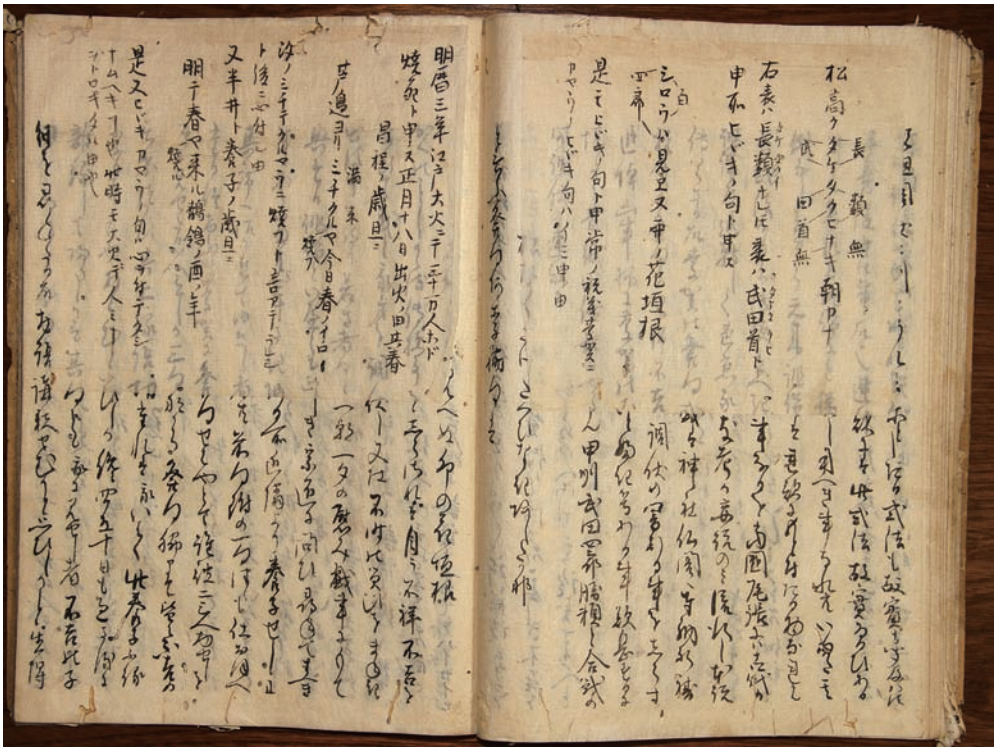
増補誹諧狂菊抄

誹諧連歌発句の事

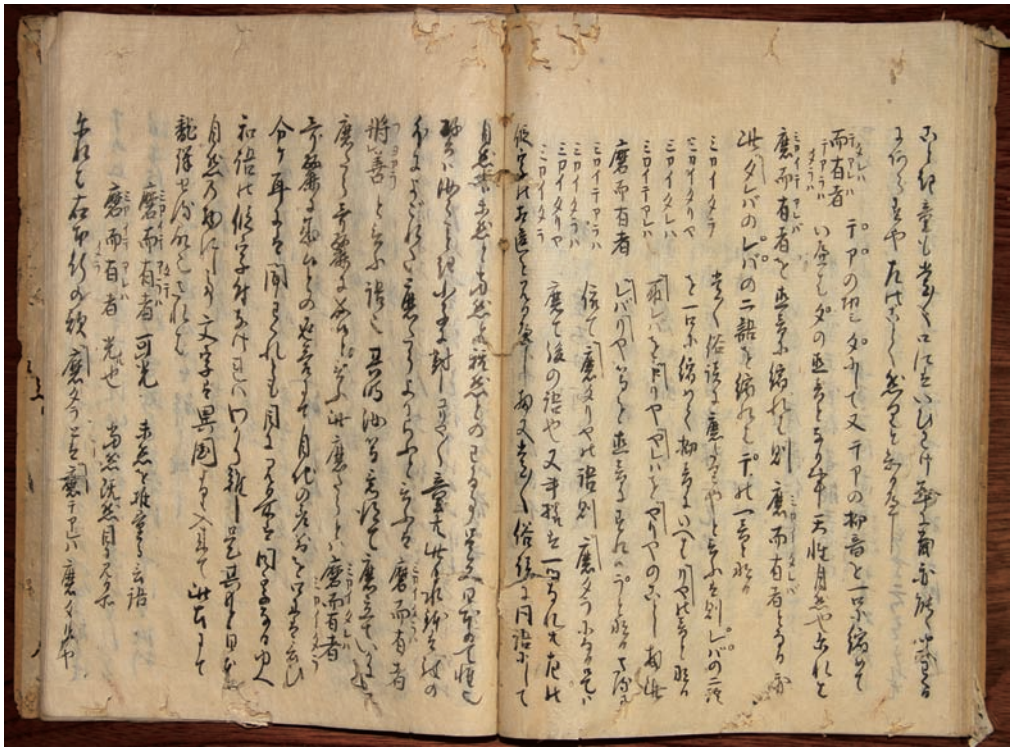
日本記に出る伊弉諾伊弉冉二尊の唱和を以て連歌誹諧等に相当する事五書に見へ別て誹諧と相当する事遠て古より共に尊び来る所なり其後日本武尊と倭姫尊八雲の神詠を始て日本武尊と云事ヤヱガキと伊弉二尊に倣和歌を示すも何も名人にあらざる事明白なり連歌誹諧を詠て古歌を集め新撰と云ふ書に詠伊勢物語より名人の歌を引て連歌に混雑して無量無数なり

但日本記に日本武尊東征の時早稲を伐て新嘗を行ふ事有て孫也

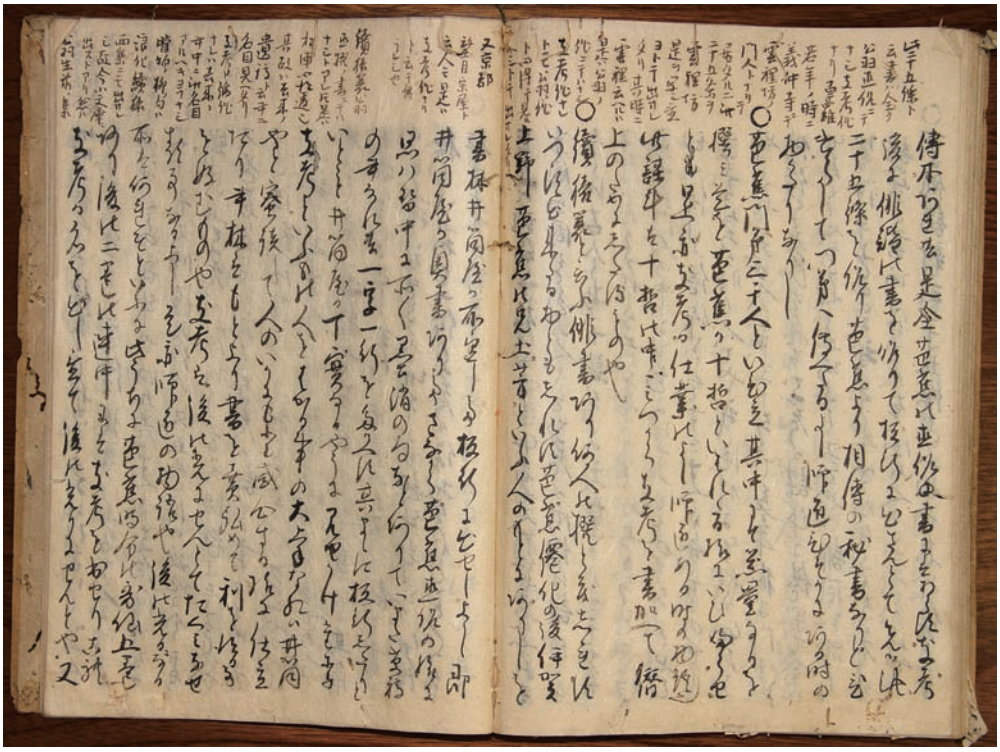
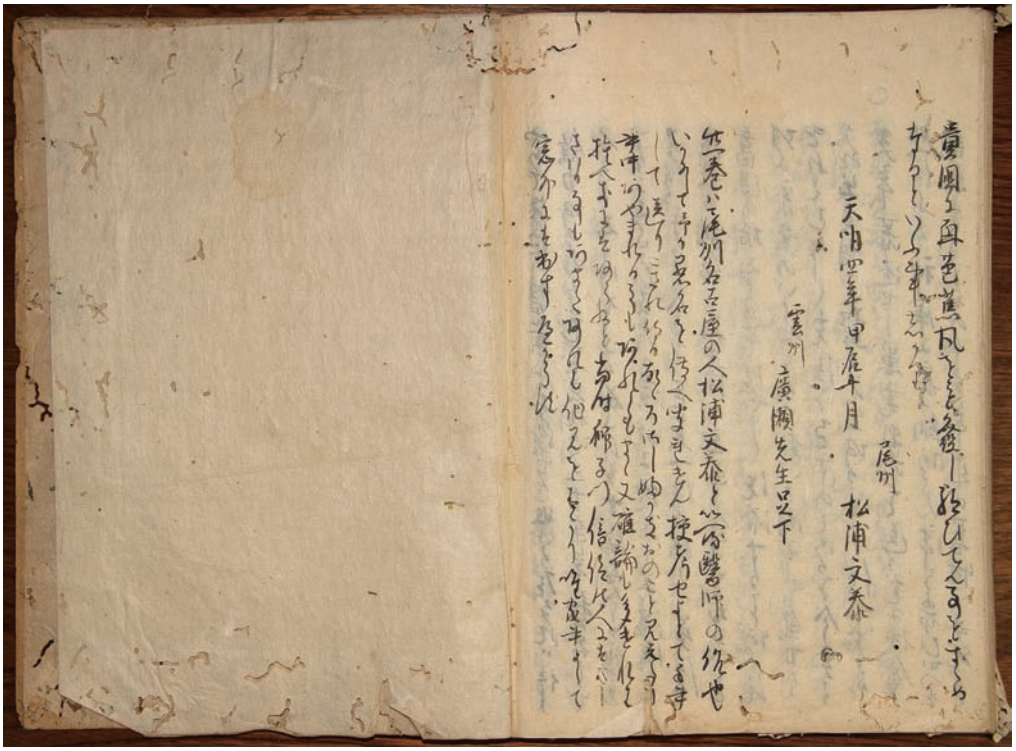
10.『増補誹諧狂菊抄』貼紙箇所（ウ三・オ二四）



11.『増補誹諧狂菊抄』本文（ウ三五・オ三六）



12.『増補誹諧狂菊抄』書込み箇所（ウ四一・オ四一）



13.『増補誹諧狂菊抄』巻末・奥書